

『人間文化』 vol. 16

人間文化研究機構 第17回公開講演会・シンポジウム

「遠い森林、近い森—関係性を問う」

日時：平成23年10月7日（金）13:00～17:00

場所：国立京都国際会館 Room D

主催：人間文化研究機構、総合地球環境学研究所

後援：文部科学省、林野庁、産経新聞社

目次

開会のあいさつ

[金田章裕](#)（人間文化研究機構長）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P 2

趣旨説明

[阿部健一](#)（総合地球環境学研究所教授）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P 4

第1部 講演

[「森林の効用と豊かさを考える」](#)

[湯本貴和](#)（総合地球環境学研究所教授）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P 16

[「香—熱帯多雨林の贈りもの」](#)

[畑 正高](#)（株式会社松栄堂代表取締役社長）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P 27

[「未来の森林づくりに向けて：行政の立場から」](#)

[末松広行](#)（林野庁林政部長）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P 40

第2部 対談

[「森を身近に感じるとき」](#) [遙洋子](#)（タレント・作家）×[阿部健一](#)・・・・・・・・・・ P 55

第3部 [パネルディスカッション](#)・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P 69

閉会のあいさつ

[立本成文](#)（総合地球環境学研究所長）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P 91

開会のあいさつ

金田 章裕（人間文化研究機構長）

本日は第17回公開講演会・シンポジウムにお越しいただきまして大変ありがとうございます。最初に、人間文化研究機構の若干の宣伝をいたします。人間文化研究機構は本日のシンポジウムの企画・開催を担当している総合地球環境学研究所と、そのほかに京都の西の桂坂にある国際日本文化研究センター、大阪の吹田にある国立民俗学博物館、関東にある国立歴史民族博物館、国文学研究資料館、それから国立国語研究所の六つの研究機関で構成されている大学共同利用機関法人です。

大学共同利用機関法人ですから、日本だけではなくさまざまな国々の研究者で共同研究をしています。さまざまな共同研究、あるいはそれぞれの研究者が長く続けておられる研究を推進しているわけです。それだけではなく、いろいろな研究機関としての共同研究も進めております。それらの成果の一端をこういった形で皆さまにお示しし、一緒に考えていただく機会として公開講演会・シンポジウムを開催しています。

本日は「遠い森林、近い森」というテーマを設定しております。皆さまもよくご承知のように、森林というものはさまざまな側面を持っています。古典的には、例えば炭酸同化作用をするから大変いいのだとか、あるいは水源の涵養のための保安林として重要であるとか、もちろん燃料として重要であるとか、さまざまな観点がございまして。

また、距離的に近いところにある里山という身近な存在や、あるいは少し遠いけれども、時々人が入って利用する奥山と称されるものもあります。あるいはわれわれが日常使っている森林資源、木材などについて言うと、遠く北の針葉樹を輸入しているもの、あるいは熱帯のさまざまな広葉樹林を利用しているもの、さまざまございまして。それぞれがいろいろな特性を持っているわけですが、そういった輸入の関連で日本国内の森林もさまざまな問題を抱えております。

最近ではさらに魚付き林と言って、海の魚の育成のため、あるいは魚が寄り付くためにも森林が重要な役割を占めているとされます。エネルギー資源の観点からも関心が集まっており、バイオマスエネルギーの問題など、いろいろな形でさまざまな森林が位置づけられております。

本日はそれらを、人々の感覚・印象も含めてどのようにとらえるのかという広い観点か

らご議論いただくことになっております。どうぞ皆さま、最後までご参加いただきまして、
あらためて思いを深めていただきたいと思います。

趣旨説明

阿部 健一（総合地球環境学研究所 教授）

今、金田機構長の方から簡単に趣旨説明がありましたが、もう一度あらためて本日のシンポジウムの趣旨を説明したいと思います。

もしかしたらあまり知られていないのではないかと思いますので、今年 2011 年は国連の定めた「国際森林年」です。[図 1（11 ページ参照）](#) がその国際森林年のロゴです。

昨年度は国連の生物多様性年でした。われわれ日本人にとっては名古屋で COP10 が開催されたので、「そうか、生物多様性年だ」と結構記憶にも残っていると思います。生物多様性年の最後のクロージング・セレモニーは日本の金沢で行われて、そのときに生物多様性年から国際森林年への引き継ぎが行われました。森林というものをこの 2011 年であらためて考えてみようということで、世界各地でいろいろな催しが行われています。その一環として、われわれもここであらためて日本の森林について考えていきます。

また、機構長の方から話がありましたように、われわれの日常生活で使用している木材は日本の森林ではなく、北方、あるいは南方から運ばれているといったことも思い起こすと、世界の森林も考えていかなければいけないと思っています。その世界の森林の中でも特に熱帯林を取り上げて話をしたいと思います。

皆さんもご存じだと思いますが、実は日本は世界有数の森林国です。国土面積に占める森林の比率は世界で 3 番目に大きいのです。京都を例に取ってもそうです。これは京都府知事の山田さんから教えていただいたのですが、京都御所は京都の町の真ん中にございます。その中に立っていると、360 度見渡しても人工の建物が全く見えない場所があるそうです。実際に東山とここ北山、そして京都というのは森に囲まれていて、ちょっと郊外に出ると北山杉といったものもあり、まさに森林の中に大きな都があったと言えるのです。

われわれ日本人は極めて豊かな森林との歴史を共有して、その過程の中で森のさまざまな恵みを受けていました。この森の恵みは、単に木材のことだけではありません。かつてはわれわれの生活に必要なさまざまな食べ物、あるいは檜皮など屋根を葺く材料も森の中

から得ていました。あるいは燃料材もありました。

5年ほど前になるでしょうか、まさにこの会場で、地球研が「森は誰のものか」というシンポジウムを行いました。その成果はまとめて昭和堂の方から本にいたしました。『森は誰のものか』という本です。亡くなられた初代地球研所長の日高敏隆先生と秋道智彌先生の二人が編集されたものです。なぜ「森は誰のものか」というテーマを設定したかという、実は森が誰のものなのかははっきりしていないからです。正確に言えば日本の森林でいきますと、ほぼ3分の2に当たる森林が国有林、残りが民有林で、ごくわずかに別の形の森林があると決まっています。法的にはそのようにはっきりと森林の所有者は決まっています。強調しておきたいのは、森林の所有者が決まることでいろいろな問題が起こってしまう、ということなのです。

かつては入会林という形で、誰のものでもないけれども、誰のものでもある、みんながそこを使っているのだという森林が日本にはありました。これは今の言葉で言うとおそらくコモンズということになるかと思いますが、そういった共有林も含めて、明治に入ったときに官民所有区別処分というものが行われました。森林の所有者を法的にはっきりしましょうということです。その結果、国有林、あるいは民有林ときちんと分かれる形になりました。

そうやって分けてしまったことが問題を引き起こしました。というのは、森林は誰のものでもないのだけれども、誰にとっても大切です。所有者が決まると、「これはおれの森林だから、君たちは使っては駄目だよ」と主張するという問題が起こったのです。その最も有名な例は、ほぼ100年前に起こった^{こつなぎ}小繫事件というものです。これは岩手県の小繫という小さな集落で起こった事件です。

このときには「これは一体、誰の森林なのだ」と、村を二分して争いが起こりました。小繫山という2000haぐらいの山だったと記憶していますが、そこをめぐる争いです。「森林を伐って売って金もうけをしよう」という人と、「いや、おれたちの生活に必要ないろいろな産物をここから得ているのだから、森林は残すべきだ」と考える人の間で争いが起こったわけです。皮肉なことに、そのときに村を二分して骨肉の争いが起こったわけなのですが、今その小繫に行ってみますと、その森は誰にも顧みられず放ったらかしになっています。

こういったことが日本の森の中で起こっていました。かつてはそれこそ「おれのものだ、おれのものだ」という争いをやっていたところなのですが、今はそれが放ったらかしにな

っています。その辺に今日の大きな森林の問題がありそうです。

どうもわれわれは森林との距離が遠くなってきているのではないか。これは実際に物理的な距離が遠くなってきているということではありません。むしろ精神的といいたまうか、あえてこういった言い方をしてみようと思いますが、「関係距離」が遠くなってきているのではないか。なかなか森林に関心が向いていないのではないかという気がします。ここが今日のシンポジウムのそもそもの問題設定になります。

例えば老齢過熟林です。戦後の拡大造林の結果、森をどんどんつくっていきました。植林地です。それがほとんど利用されず、市場に出回ることもなく、そのまま伐採適期を過ぎてしまった。そういうものを老齢過熟林という言い方をします。一方で、日本の木材自給率はほぼ4分の1で、ほかの国から森林を輸入しています。この辺の話は後で末松林政部長の方からお話いただけるかと思いますが、一つだけ私の方から申し上げておきますと、年間の日本の木材需要量が7000万立米です。植林された森林が毎年大きくなっていますが、その量がちょうど日本の需要と同じ量なのです。つまり、うまく使えば日本は木材を自給できるということなのです。

ほかにもいろいろな問題があります。いろいろな森林が顧みられず、放置されています。その放置された森林がごみ捨て場になるといったことがあちこちで起こっています。森林の所有者に何とかしてくれと言いにいっても、その所有者が引っ越しなどを繰り返してどこに行っているか分からないという状況が多発しています。

林野庁は国際森林年に当たってポスターを作り、「最後に森に行ったのは、いつですか？」という問いかけをしています。もう一回皆さん考えてみてください。森に行ったのはいつごろなのか。だんだん距離が遠くなっていないでしょうか。だったら、もう一回日本の森林を再生させて豊かに利用するために、この距離を縮めるいろいろな手立てを考えなければいけないと考えています。

今回のシンポジウムは、あえて問題の指摘は講師の皆さんにお願いしていません。それよりも具体的にどのような形で森林との距離を縮めていくのかについてお話しただけだと事前をお願いしています。

[図2 \(12ページ参照\)](#) は日本の森林です。これは春先ですが、本当に美しいですね。滋賀県の朽木村^{くつき}のところ。本当に豊かな森林です。

一方で、こういった山村からは人がいなくなっています [\(図3 \(12ページ参照\)\)](#)。人が住まない家が豊かな美しい森林の中にぽつんと残されています。

[図4 \(13ページ参照\)](#) は田んぼなのですが、田んぼの周りを、電柵という言い方をしますが、電気が通る柵で囲っているのです。これは何故かというと、森林が放置されているために獣害が多くなっているのです。春先に限らず、秋になっても山からどんどん動物が下りてきます。シカの害を防ぐためにこのような電柵を村の中、田んぼの中に張り巡らさなければいけないのです。

家の前にはこういったシカ用のトラップ（罠）が置いてあります [\(図5 \(13ページ参照\)\)](#)。秋になってくると、こんな家の前までシカが下りてくるそうなのです。「それはいいではないですか、シカが取れたら、シカ肉はおいしいから」と思わず言ってしまったのですが、実は森から下りてくるようなシカは全然おいしくないそうです。要するに、けんかの強い元気なシカは森の中にいるのです。そこで餌の取れないような年取ったシカが下りてくるので、食べても全然おいしくないということです。ともかく、こういった罠があちこちに仕掛けられています。

家の周りの家庭菜園みたいなところは、こういった形で囲いをしなければ、せっかく作った野菜をシカに食べられてしまいます [\(図6 \(14ページ参照\)\)](#)。

[図7 \(14ページ参照\)](#) の左側はシイタケです。ここにも妙なものがあります。役に立つのかわかりませんが、こういったマネキンはサルのを防ぐものです。

[図7](#) の右側は美しいスイセンが咲いています。これは丹念に丹念に育てているのだなと思って「1本か2本かいただけますか」と聞いたら、「全部持って行っていいですよ」と言われました。これは自然に生えてくるのです。自然に生えてくるほかの草は全部シカに食べられるのですが、スイセンはシカが食べないそうです。だから、シカが食べ残したものです。妙な言い方ですが、今の日本の山村風景はシカがつくっているような感じもします。

熱帯林の話に移りたいと思います。熱帯林にもいろいろな問題があります。

今年度は国連が定めた国際森林年だと言いました。実は 1992 年、もう 20 年前ですが、「環境と開発に関するリオディジャネイロ宣言」がありました。皆さんご記憶にあるかもしれません。地球サミット、あるいはリオ・サミットと言われた会議です。そのとき、気候変動枠組条約が議論され、その後 COP3 のときに、京都議定書がまさにこの会場で決められました。温暖化に対して国際社会が何らかの対応をしなければいけないとしてできた条約です。

同時に、生物多様性条約についても議論が始まりました。これは先ほど申し上げましたように、COP10 が昨年度に名古屋で開催されました。実は地球研サミットのときには世界森林条約も併せて企画されているのです。ところがこれは途上国の反対によって実現しませんでした。その代わりに「森林原則声明」が出されたわけです。これは法的に拘束力のないものです。条約という形では締結できませんでした。

ただ、このころから熱帯林に一般の人が関心を持ち始めました。一種のブームになったわけです。しかしこれは本当にブームで終わりました。熱帯林への関心が世界中で高まったのですが、この地球サミット以降に破壊された、あるいは消失した森林面積、熱帯林面積の方が、それ以前よりもはるかに多いのです。せっかくみんなの関心が熱帯林に向いていたのですが、それがブームで終わってしまったわけなのです。

失われた熱帯雨林はかわりにどうなっているかと思ったら、東南アジアの場合オイルパームになっています。われわれの生活のいたるところでオイルパームから作られる油が使われています。近年ではバイオエナジー、バイオエタノールという形で再びオイルパームに注目が集まり、どんどん熱帯林がオイルパームに変わっています。遠い森林なのですが、実はわれわれの生活に身近にかかわっている森林です。

少し私の調査のこともお話したいと思います。私はずっと熱帯林の研究をしてきました。もう 30 年近くになりますが、インドネシアのスマトラで調査をしています。

マングローブが私の調査地です。このマングローブに調査に行くのが大変なのです。というのは、遠浅で、道なんかありませんので船で連れて行ってもらいます。でも、船が沖合で止まるのです。「これ以上先に進むと船底が引っかかる。ここで降りてくれ」「降りて

くれと言われても、海の中ではないか」「いや、大丈夫だ」と言うので、実際に降りてみると、腰ぐらいまでぐらいしか水はないのです。

歩いて調査に行つて、「夕方4時には必ず迎えに来てくれよな」と言つて迎えに来てもらいます。来てもらわないと、マングローブの中で一晩過ごすなんて嫌だなと思っているのですが、来てくれても、近寄つてくれずに遠くで待っているのです。しょうがないので疲れた体を引きずりながら歩いて行きます。

熱帯林の調査、特にマングローブの調査などは大変なのですが、入ってみると本当にこんな美しい森林はないと思います。特に潮が満ちていくときが素晴らしいのです。先ほど申し上げましたように遠浅です。そこに潮がどンドンすごいスピードで行くのです。人が歩くぐらいの速さでしょうか。それで満潮のときに水がぱつと入ってくるのです。そうすると、今まで泥だったところが水面に変わり、同時にマングローブの木の葉っぱが水面に映し込まれます。緑のカーテンを引くような状況になります。本当に美しいと思います(図8 (15ページ参照))。

ただ、こういった森林もどンドン破壊されています。図9 (15ページ参照) は図8と同じところですが、この森林が実はチップとして日本にまでやってきています。製紙され、まさにわれわれの使っている紙になっているのです。

そういった意味で、遠い熱帯林かもしれないけれども、身近な森林でもあるということです。あらためてわれわれは日本のことだけではなくて、世界の森林について考えなければいけません。

具体的にいろいろなことが今、行われています。林業女子会はご存じでしょうか。今は女性の方が林業に携わっています。若い女性の方なのです。林業はカッコいいのだということです。僕らの世代は「ナウい」と言いますが、今は「クール」という言い方をしてみたいです。チェーンソーを持って働くのはクールだということで、若い女性が林業にも興味をもってきています。

それから、森の聞き書き甲子園というものもあります。これは野球の甲子園から名前を借りたわけですが、高校生が実際に山村のお年寄りの方、林業や森林のいろいろなことを

知っている方から聞き書きをします。森の名人と呼ばれる方々に高校生が聞いていくのです。それがすごく大事です。高校生から見たら全然知らない話を、自分のおじいちゃん、おばあちゃんに当たる人から聞いて、それを本にまとめるということもされています。

森を身近にする活動がいろいろなされています。今日はまた別の形で森林を身近にする話が聞けると思っています。いろいろな形で森との新たな関係が構築されています。

最後にちょっとだけ「新たな関係」をご紹介します。

最初は熱帯雨林です。今、マレーシアの人が結婚するときに熱帯林をバックに写真を撮るのがはやっているそうなのです。クアラルンプール郊外のマレーシア森林研究所のすぐ近くにある古い古い熱帯林では、今は入場制限をしているそうなのですが、そこに毎日3～5組が来て写真を撮って帰るそうです。ちょっと私たちの感覚とは合わないのですが、結婚式にもそういう形で熱帯林を使っています。

日本の話に戻します。冠婚葬祭というわけではないのですが、岩手県の一関の樹木葬というものがあります。亡くなったときにお墓ではなくて山に骨を埋め、そこに木を1本植えていきます。予約でいっぱいだそうです。遠く関西からも予約されている方が多いそうです。そして日本の里山みたいな形に戻そうということです。これも新たな森とのかかわり方かもしれません。スギの植林地だったところを里山的な景観に戻す。そこに亡くなった人々が眠っているということです。

さて、今日のプログラムについて簡単に紹介しておこうと思います。お三方に話をさせていただきます。

まず研究の立場から、同僚の湯本教授に話をさせていただきます。キーワードは生態系サービスということになるかと思います。

企業の立場からは、京都の松栄堂の畑社長にお話をいただきます。「熱帯多雨林の贈りもの」という副題が付いていますが、皆さんのお手元に松栄堂さんからいただいた、まさに熱帯多雨林の贈りもののお香があると思います。ご発表のときにちょっと焚いてみようかなと畑社長がおっしゃられたので、香りを実際に楽しんでいただければと思います。

最後に行政の立場から、林野庁の末松林政部長にお話をいただきます。一昨年、林野庁で「森林・林業再生プラン」を決めたということですので、そのお話を聞かせていただけ

るものだと思っています。

この三方のお話を伺った後、対談の形で、遙洋子さんから、お三方の発表に対して素朴な、かつ厳しい質問をしていただければと思います。私が聞き役ということになっています。それを受けて、今度はパネルディスカッションを、話をさせていただいたお三方としていこうと思います。

何度も申し上げますように、われわれだけというよりも皆さんのいろいろなご意見もいただきながら、みんなで日本の森林、世界の森林を考える場にしたいと考えています。私自身楽しみにしております。皆さんもぜひ楽しんでいただければと思っています。



図1「国際森林年ロゴマーク」（出典：国連森林フォーラム）[\(本文へ\)](#)、[\(講演3本文へ\)](#)

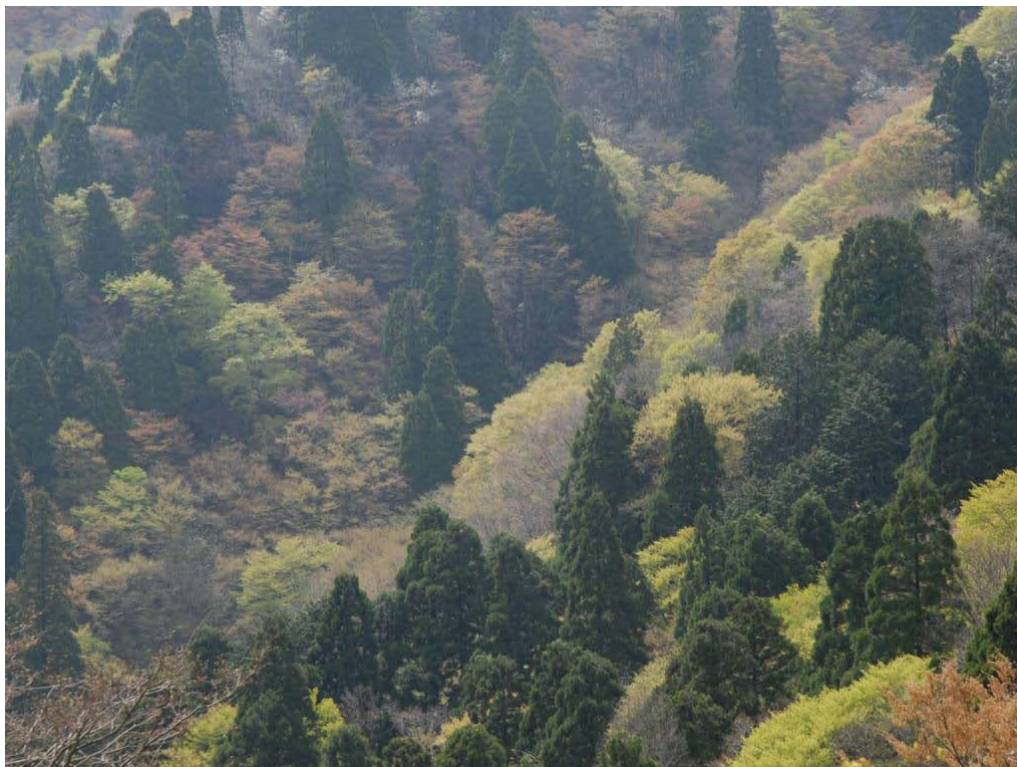


図 2 (著者撮影) [\(本文へ\)](#)



図 3 (著者撮影) [\(本文へ\)](#)



図4 (著者撮影) ([本文へ](#))

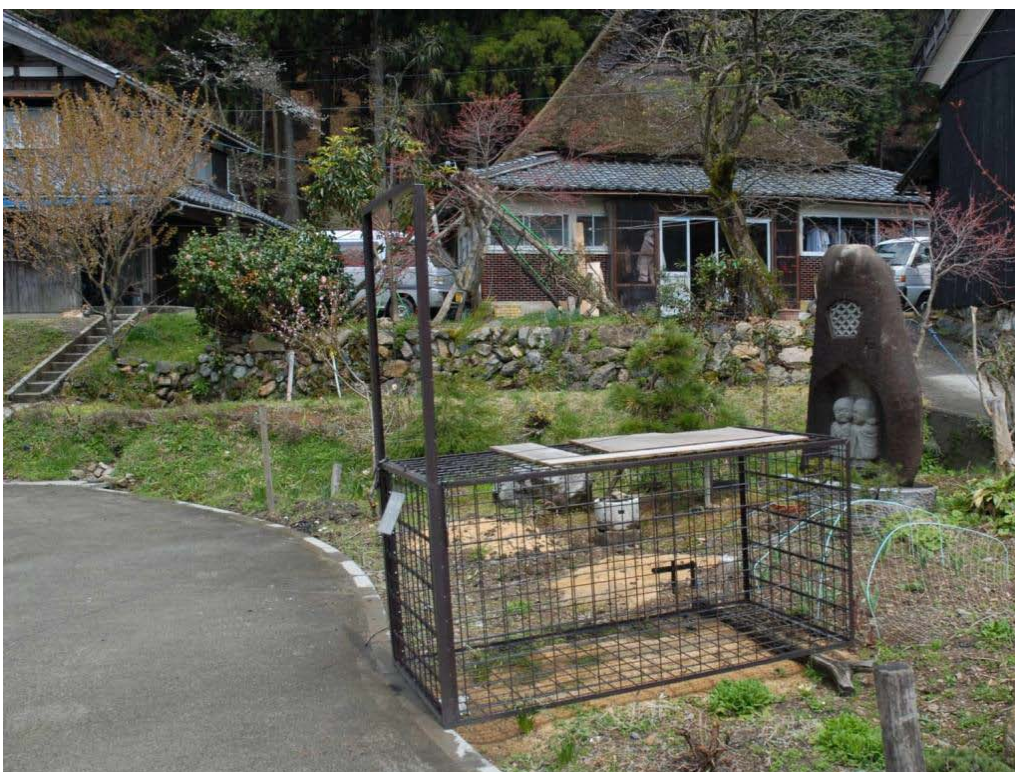


図5 (著者撮影) ([本文へ](#))



図6 (著者撮影) [\(本文へ\)](#)



図7 (著者撮影) [\(本文へ\)](#)



図8 (著者撮影) [\(本文へ\)](#)



図9 (著者撮影) [\(本文へ\)](#)

講演「森林の効用と豊かさを考える」

湯本 貴和（総合地球環境学研究所 教授）

先ほど来、日本は豊かな森林国であるという話をされていますけれども、まず100年前はそうでもなかったという話から始めたいと思います。このころは、燃料や肥料も薪などの植物でしたから、薪、草、落ち葉などを過剰利用、すなわち取り尽くしてしまい、松の根っこ（松根）まで掘り起こして、瀬戸内海沿岸ではあちこちの山々をすっかりはげ山にしてしまいました。

さらに昭和になっても、はげ山が広がっていたわけです。当時は砂防ダムも少なく、はげ山には土砂崩れや土壌浸食を防止する機能が落ちていますから、川には常に土砂が多く堆積していました。

私の子どもの頃、昭和30年代から40年代には土砂が多い川の風景はあちこちにあったと思うのですが、今は砂防ダムなどが整備されたので、なかなか土砂が多い河川はありません。たかだか40～50年前には、土砂に埋もれた橋脚が日本の至るところにみられたわけです。

日本の各時代の地形図を集大成したもので『アトラス』とよばれるものがあります。それをみますと、凡例に「荒地」とありますが、実態は、はげ山あるいは草地です。そういう「荒地」が1850年ごろには、北海道をのぞく日本全土ずいぶん広がっていたのでしょう。当時は燃料や肥料を採ったために、「荒地」に分類される景観が広がっていたわけです。

いっぽうで、森林として「針葉樹林」、「広葉樹林」、「混交林」という凡例がありますが、日本列島は、1985年から時代を下るほど、この森林の締める面積が大きくなっていきます。もちろん都市部の拡大は、特に東京圏、近畿圏で著しく目立つのですが、その中間部分で森林面積が大きくなってきて、針葉樹林あるいは混交林がどんどん増えてくるわけです。

西日本では、明治・大正期から現代にかけて、草地や荒地がだんだん減って行って、針

葉樹林あるいは混交林が増えていったということが顕著にみられます。

そのように考えると、現在の日本列島の森林は過去 1000 年の間で最も広い面積で、かつ材積算も一番多いとあって間違いありません。

過去 2000 年の人口、耕地面積、森林面積の変化についてお話しますと、弥生時代からだんだん人口が増えていき、焼畑や採草地あるいは荒廃山地などの拡大で森林面積がどんどん減ってきたのですが、現在は薪炭林の利用が減り、一般用材の森林がどんどん増えている状態になっています。

日本の木材自給率の変化は、2003 年で 18%、2010 年で 25%とされています。日本は、本来、国内で木材を自給できるのですが、それを活用せずに、他国のアメリカ、ロシア、オーストラリア、ニュージーランド、あるいは東南アジアの国々から、丸太や合板などのいろいろなかたちで木材を輸入しています。自国の森は温存しておいて、他国の資源を買っているというのが今の状況です。

ここまでは「近い森」の話ですけれども、では、「遠い森林」はどうなっているのでしょうか。例えば、インドネシア国スマトラ島の森林分布の変化ですが、1985 年のときには森であったところが、それ以降にどんどん森ではなくなってきました。1992 年にリオ・サミットがあって熱帯林の著しい減少が大きな問題となったにもかかわらず、その以降も事態は改善されず、どんどん熱帯林が減っているという話が先ほどありました。まさしくスマトラ島では、そのような事態がいまでも進行しているわけです。

ボルネオ島もそうです。1950 年ごろはボルネオ島の大部分が森林だったのですけれども、1985 年になると森林でない部分が増えてきて、2000 年、2005 年、2010 年と、さらに森林は減少を続けています。2020 年は現在の傾向をそのまま延長した予測ですが、さらに森林は減り続けるとされています。

その大きな理由は、アブラヤシ（オイルパーム）のプランテーションですが、もう一つは商業伐採です。商品作物の大規模栽培と森林の商業伐採のふたつの問題がスマトラ島やボルネオ島、さらには東南アジアの多くの国で起こっているわけです。

熱帯林の減少がどのように野生動物の生活に影響を与えているかということを見てください。オランウータンは、潜在的には分布範囲が随分現在の生息地に比べてずいぶん広いのだと考えられていますが、今はスマトラ島の一部とボルネオ島の一部に生き残っているにすぎません。ジャワサイも、典型的な例です。現在となつては、野生のジャワサイは70頭しかいないのです。ベトナムでは5頭以下なので、ジャワ島の西部のウジュン・クロン残っているものが個体群としては一番大きいのです。

スマトラサイは少し状況はよいのですが、それでも世界中で分断された個体群として300頭ぐらいしかいなくなっています。サイの場合は必ずしも森林伐採だけではなく、犀角が漢方で非常に重宝されるので、サイを密猟するというようなことが今でも起こっていることも絶滅の大きな要因です。

次の例はトラです。トラは1900年ごろには非常に広い範囲に分布していたのですが、それから90年たった1990年ごろにはそのうちのわずかな場所にしか残っていません。ベンガルトラ、アムールトラ、スマトラトラ、アモイトラ、バリトラ、ジャワトラ、カスピトラと、7亜種が存在していたトラですが、バリ島にいたバリトラ、ジャワ島にいたジャワトラ、カスピ海沿岸にいたカスピトラは絶滅していますし、おそらく、中国のアモイトラも絶滅、朝鮮半島にいたアムールトラの個体群もほぼ絶滅です。

このトラの分布域の縮小にも、森林の減少とトラの密猟がかかわっています。例えば、虎の骨、虎骨（ここつ）と申しますが、これはリウマチの特効薬とされています。スマトラ島には今でもトラがいるのですが、昨年だけでも7頭のトラが密猟されています。虎骨やトラの毛皮を売るために、密猟が止まらないのです。

では、東南アジア、東アジアでは、どこの国でも森林は減少傾向なのか。もちろん日本では森林面積は増えていると申しましたが、他の国はどうなのだろうかということです。1990年以降、過去20年間をみますと、中国では森林面積が増えているようです。インドネシアは最初の10年ほどで大幅に減少して、その後は微減しながら現状維持かというところ。ミャンマーは現在でも減り続けています。それから、カンボジアでも、ずいぶん

と減り続けているのです。

1990年を100とした場合に2000年、2005年、2010年にどのように変化しているかをみるとその傾向はさらに明らかで、中国では増えており、ベトナム、フィリピンがすでに増加に転じています。ちょうど日本で森林がどんどん回復してきたように、ベトナムやフィリピンでも周りの国から木材を輸入することによって、自国の森林がむしろ増えているのです。もちろんこの増えた森林の質についてはいろいろ議論があるのですが、量としては既に中国、ベトナム、フィリピンなど、増加に転じている国があるというのが現状です。

さて、その森林面積の変化は、人間生活にどのような影響を与えているのでしょうか。「自然の恩恵」を、国連ミレニアム生態系評価で生態系サービスという言葉で表現しています。この「自然の恩恵」はいくつかに類別できます。

まず、生態系が生産する「モノ」です。そのうち食糧や水が重要ですが、それ以外にも、燃料、繊維、化学物質、遺伝資源など、生態系が生産するモノというかたちで、人間に対する恩恵を与えることを供給サービスと呼びます。

二番目が、気候の制御や病気の制御、洪水の制御というように、生態系が働くことによって何かを調整するような「自然の恩恵」で、調整サービスという言葉で呼びます。治山治水もそうですし、水の浄化作用もそのようなもののひとつです。

三番目に、生態系から得られる非物質的な利益を文化サービスと呼びます。例えば、精神的なもの、レクリエーション、それから先ほど阿部さんもマングローブが非常にきれいだという話をされていましたが、そのような美的な利益、さまざまなイマジネーション、インスピレーションの源であるとか、教育的な効果、共同体としての利益、あるいはシンボルというような非物質的なものをひっくるめて文化サービスとされています。

さらに、供給サービス、調整サービス、文化サービスを与え続けるには、生態系が健全に機能しないと駄目ですから、生態系自体を維持すること、つまり土壌を作る、栄養塩を循環させる、あるいは植物が光合成をするということを、基盤サービスと呼びます。

このようにわざわざサービスと名付けた限りは、そのサービスに対して人間社会はきちんと対価を払っているのだろうか、使用料を払っているのだろうかという論になります。この生態系サービスという概念は、「自然の恩恵」を経済的に評価して、それに対する支払いを誰がどのように負担するのかという重要な議論につながっていくベースなので

す。

森林にはさまざまな産物があります。大きく分けて木材林産物と非木材林産物があり、木材林産物はもちろん丸太やチップ、パルプのようなものですが、非木材林産物というとキノコや山菜などの食料、油脂や薬の原料、あるいは森に住む動物もそうです。あるいは調整サービスもここに入っています。このようなさまざまな恩恵を、森林は私たちに提供してくれるわけです。

ただ、ここで問題なのは、森林が提供してくれる多種多様なサービス、あるいは製品には、それぞれの間でトレードオフがあるということです。つまり、何かを優先すると、それ以外は犠牲になるわけです。例えば、二酸化炭素を吸収する能力が高い森林は若い森林で、生物多様性が高い老齢林とは違うわけです。あるいは、きれいな景観をつくって観光に適した森林と、二酸化炭素を吸収する森林は違うわけです。すべてのサービスを平等に提供してくれる森林というものは、存在しないのです。

森林のもつさまざまな機能の間に矛盾関係がある、トレードオフ関係があるというのが一番大事なポイントです。例えば、立派な用材をつくるために20～40年という長伐期で育てる林と、薪炭として5～10年の短いサイクルでどんどん伐採していく林、さらに毎年野焼きをして草を生やすような利用の間では、明確な矛盾関係、トレードオフがあります。それから、用材を作るという供給サービスと治山治水という調整サービスの間でもトレードオフがあります。あるいは用材を作るという供給サービスと観光という文化サービスの間でもトレードオフがあります。もともと生態系サービスは極めて多面的なものですから、このようなトレードオフが必然的に生じるわけです。

この問題を人間社会に関連させていうと、互いにトレードオフ関係にある異なる生態系サービスのそれぞれ依存する人々が存在するということです。あるいは、排他的な関係にある別の生態系サービスに価値を持つ人たちが存在します。このような生態系サービス間のトレードオフ関係が人々の間に利害対立を生むのです。

少しボルネオ島の話をしてしまおう。ボルネオ島は、ブルネイ国という独立国と、サバ・サラワクというマレーシア国のふたつの州と、カリマンタンと呼ばれるインドネシア国領

土から成っています。私たちは、もっぱらサラワク州で研究しています。

サラワク州の熱帯雨林は、最大樹高で70mもあります。私がもう少し若いときには、高さが70mぐらいの木に登って木の上の世界を研究していました。あるいは翼を広げると1.8mになるオオサイチョウという鳥が、どんな果物を食べて種子を運ぶのかというような研究もしていました。

サラワク州では、丸太はもともと重要な輸出品目でしたが、資源保全のために輸出するのを規制して、輸出量が大きく減少しました。

アブラヤシ栽培面積（プランテーション）は1975年からずっと一貫して増えています。特にサラワク州では、ここ10年間ぐらい非常に増えています。

サラワク州のアブラヤシ・プランテーション面積の歴史的な推移を地図でみると、アブラヤシ・プランテーションや、アカシア・マンギウムというパルプになる木材の植林など、生物多様性に乏しい単純な組成の植林地に変わってきます。その分、もともとの原生林は減っているため、そこにいる生物多様性に大きな影響がでています。

サラワクには、現在いろいろなタイプの森があります。例えば焼畑をしている場所では、焼畑をした後に休閑地となる二次林がだんだん成長していきます。あるいは大規模なゴムのプランテーションではなくて、粗放な規模の小さいゴム園もたくさんあるのです。そういう人間の土地利用に伴って、さまざまな森や林が存在しています。

人々は原生林も含めたさまざまな森林から、さまざまな林産物を得ています。例えば、原生林に近い森から得られるのは、藤（ラタン）です。性質は竹に似たもので、いろいろな家具や道具を作ります。あるいは小規模なコショウ畑を作ったり、小規模なゴム園でゴム液を採取したりします。

また、これも林産物のひとつといえるのですが、大きなイノシシやシカを狩猟したりします。この地域に住むイバンはキリスト教徒なので、ブタ肉も食べられるのです。このように森林に依存した人々のさまざまな生業があるのです。

それから、次の松栄堂の社長のお話につながるのですが、沈香という香料の木もあって、原生林で採取するのです。プナンという狩猟採集民がその例です。狩猟採集民といえども、沈香は自分で使うものではなく、採取したものを商品として売ります。狩猟採集民が森の中で孤立して生きているのではなく、沈香の採取を通じて、何世紀もの間、中国との貿易ネットワークにつながってきたわけです。

プナンのように原生林の産品に依存する人たちと、原生林を伐採したり、あるいは伐き開いたあとにプランテーションを作ったりする人たちの間には、完全に利害相反があります。ですから、かつてのサラワク・キャンペーンのような「私たちの森をこれ以上伐るな」という抗議行動もあるわけです。

何も暴動までいかななくても、そういう利害相反は日本にもたくさんあります。例えば屋久島です。屋久島は今では世界遺産で、森林を守ることによって、エコツーリズムという新しい産業を興して生計をたてるという選択を既におこなったわけです。

しかし、島津藩のときから屋久杉という非常に高価な材木がありますから、それをめぐって、かつては伐採か保護かという対立が生まれました。

森林軌道やケーブルのない時代には、大きな材木は運べなかったもので、山中で鉋で割って屋根を葺く材(平木)に加工していました。平木 2310 枚で米 1 俵と同じだけの値段です。米の獲れない屋久島では、米の代わりに年貢として、この平木を納めていたわけです。

1920～1960 年の国有林施業初期の時代には、屋久杉は学術的に重要なものだということで天然記念物になったり、一部は特別天然記念物になったりしています。

他方で、屋久杉を切ってそれを生活の糧にしようという動きも並行して依然としてあるわけです。初期の伐採では屋久杉を伐って、トロッコで搬出するのが屋久島の大きな産業でした。

奥へ奥へと屋久杉の伐採が進むなかで、標高の低いところの広葉樹林もパルプの原料と

して伐採が始まりました。そのいっぽうで、霧島屋久国立公園への編入などの保護の動きもありました。屋久島では、このように保護と伐採が並行してずっと続いてきたわけです。

住民側とひとくちでいいますが、屋久島では「屋久島を守る会」、つまり屋久島の自然を守るという人たちの集まりがあるいっぽうで、主に林業従事者が自らの生活を守る必要があるというので「屋久島の生活を守る会」を結成したり、保護側はさらに屋久島原生林の「即時全面伐採禁止」のような過激な提案をしたりします。屋久杉を伐採して生きていこうという人たちと、屋久杉を守らなければいけないという人たちの間の利害対立が、この島ではずっと続いてきたわけです。

このような経緯があったのですが、ユネスコのMAB地域になったり、最終的には世界遺産になったりという世界的な価値観が介入してきて、今はほぼ伐採をやめて、森を守りながら生活の糧を得るエコツーリズムという方向になっています。屋久島は人口が1万3000人ですが、大人も子どもも入れて100人に1人、つまり130人あまりがエコツアーガイドをしています。ただ多過ぎる観光客が問題となってきて、今度は観光と自然保護をいかに両立させるのかという新しい課題が生まれています。

屋久島ではシカ、ヤクシカというニホンジカの亜種がいますが、最近、どうも増えすぎているという報告があります。島ではよくシカとサルがセットで見られていて、人が近づいても全然逃げません。

おかげで林床の草が全部食われてしまって土壌流出が起り始めていたり、もともと種多様性の高かった植物のうち、いくつのシカが好む種類が喰われて絶滅危惧になったりしています。

最後に、今回のテーマである「森林とどのようにかかわっていくのか」という話になるのですけれども、「近い森、遠い森林」と本日のタイトルにございますように、私たちもさまざまな立場にあります。「近い森」というのは自分たちもひとりのステークホルダー、利害関係者だという自覚で行動をするのだと思いますし、「遠い森林」に対しては、ひとつは木材やさまざまな熱帯産品の消費者として、もうひとつは国際社会の一員として、あるい

は日本国の納税者としてどうかかわるのかということだと私は思っています。

先ほどの屋久島の例を続けます。

絶滅が危惧されているヤクタネゴヨウという樹種があります。屋久島と種子島にしかない固有の五葉松です。2000年当時はもう3000本はないだろうといわれたのですが、その実態をきちんと調査して民間で保全計画を考えようという「ヤクタネゴヨウ調査隊」と名付けられたボランティアの活動が生まれました。その後、「屋久島まるごと保全協会」という、人を含む屋久島全体の生態系の保全をどのように考えるのかという会ができて、今では「屋久島生物多様性保全協議会」というかたちに進化しています。2008年の生物多様性基本法制定を受けて、「屋久島生物多様性保全協議会」は環境省の支援事業として活動が維持されてきています。調査隊、保全協会、屋久島町、県の外郭団体である屋久島環境文化財団がメンバーとなり、活動をしています。

「ヤクタネゴヨウ調査隊」の具体的な活動は、よくわかっていないヤクタネゴヨウの実態調査をすることから始まりました。分布域は標高が1000mを超えていて、ほとんど垂直になっているような斜面やその先の尾根など、非常に険しいところにヤクタネゴヨウは生えています。そこにみんなで行ってヤクタネゴヨウを一本一本、直径を測り、測量して位置を確定するといった作業を続けています。

調査したヤクタネゴヨウの位置をマッピングしてみたら、非常に詰んだ等高線のなかにあるのです。現在3500本ぐらいのヤクタネゴヨウのマッピングは終わっています。こういった活動を地道に十数年やっているのです。

また、このようなヤクタネゴヨウの実態調査を踏まえて、町や県、あるいは営林署といういろいろ話し合う場を設けて、いかにヤクタネゴヨウを保全していくのかということを検討しています。

私も最初から「屋久島生物多様性保全協議会」のメンバーでずっと一緒に活動しています。そこでは、森林管理署や環境省、文化庁、あるいは鹿児島県、町などの行政と、森林

総合研究所や大学あるいは地球研のような研究機関、そして一般市民の三つのステークホルダーが情報を共有し、相互理解をし、協力していくということを目指しているわけです。屋久島はここからは遠いですが、私にとっては、ステークホルダーのひとりとなっている「近い森」との関係です。

「遠い森林」をどうするのかというのは、とても難しい問題です。

地球温暖化の抑制のために、REDD という考え方が脚光を浴びています。これは森林減少・劣化による温室効果ガスの排出を削減するため、森林をいかにして増やしていくかを考えていこうというものです。ここでは大幅に市場メカニズムを入れようとしています。排出権取引という言葉はご存じだと思いますが、二酸化炭素の排出権を取引しよう、あるいはカーボン・オフセットという仕組みを取り入れていくことで、市場メカニズムを使って森林劣化により増加した温室効果ガスの排出量を削減する考え方です。京都議定書の後、特に日本などでは実効性が伴ってこないのですが、国際的にはこのような努力が進んでいます。

もう一つはTEEB（生態系と生物多様性の経済学）です。昨年の生物多様性条約締約国会議 COP10 のときに最終報告書が出て、一般にも聞かれるようになった言葉で、生物多様性を保全するために経済的なメカニズムをいかに導入していくのかという考え方です。例えば、生物多様性に配慮された製品を認証し、特に政府関係の公共事業などが率先して認証された製品を使っていく。あるいは生物多様性オフセット。これは開発段階で環境への影響を最小限にとどめ、それでも残ってしまう影響については別の場所で担保するというものです。「生態系サービスへの支払い」という考え方です。生態系が人間に提供するサービスに対して受益者である人間社会がそれを負担していく仕組みづくりです。

木材認証制度（FSC）を例にしましょう。認証機関を設けて、木材が持続可能な方法で伐採されて、適切な植林もしていることを確認した上でお墨付きを与えて、それを意識の高い消費者が買うようなメカニズムを作るのです。この認証機関のコストが非常に高いのでなかなか普及しないのですけれども、スキーム自体はかなり前から進んでいます。

もう一つは生態系サービスの支払い(PSE)の例です。森林を維持すると地権者にはある程度の利益が得られるのだけれども、それを農地にする、アブラヤシのプランテーションにすると、森林として維持するよりも利益が増えます。ただ、地権者としての利益は増えるのですが、公益的に考えると、水資源の劣化、生物多様性の喪失、CO₂の放出のようなマイナス面があるわけです。このマイナス面を考慮して、公益的機能あるいは生態系サービスの部分を受益者である住民みんなが負担することによって、地権者の利益を上乗せして、地権者が森林を維持する経済的なインセンティブを高めるというのがPSEです。これはまだまだ進んでいませんが、水源税などはこのPSEに相当するものだと考えてもいいものでしょう。

講演「香—熱帯多雨林の贈りもの」

畑 正高（株式会社松栄堂 代表取締役社長）

ご紹介いただきましたとおり、私自身は基本は烏丸二条という場所でお香の商いをして
いる人間です。そういう仕事の現場にいる者が、若い会社の社員のみなどとどんなことを
考えて、どんなことに時間を割こうとしているか、一緒に考えながらアドバイスをいただ
けたら嬉しいと思っております。

私が日本の香りという仕事をしながら大変不思議だと思うのは、全くもって材料等が京
都あるいは日本という国にないことです。しかしながら、それがこの京都という長い歴史
に育まれた町の真ん中でこうやって成り立つわけですし、例えば江戸時代は鎖国をしてい
たと学校で習いましたが、その鎖国といわれた時代に私どもの商いも始まっています。ま
た、お香の歴史をひも解くと、『源氏物語』に非常に深くかかわっていたりします。そして、
2008年の源氏物語千年紀のときには、『源氏物語』と香について源氏を研究される先生方
と交流の機会をいただいたり、とても不思議な仕事をさせてもらっていると感じるわけ
です。

なぜ京都という場所で、なぜ日本という場所で、そして世界の多くの方がこの日本人の
香りに対する姿勢に関心を持って見つめてくださるのかということを見ると、私たちの日
本の香りがいかに熱帯多雨林の恵みを受け続けてきたかという歴史の不思議さをどうして
も考えてしまいます。

よく、お香は何から作るのと聞かれることがあります [\(図10 \(35ページ\) 参照\)](#)。意
外と皆さんが口にお入れになっているものなのです。一番分かりやすいのはシナモンです。
京都の有名な八つ橋のフレーバーでもあります。実は和ニッキといって、日本国内でもニ
ッキは取れてきました。ですから、村の鎮守の祭りのときにはニッキ餅を作るなどという
のが年に1回の楽しみだったと思うのですが、和ニッキよりもはるかにたくさんの量の、
もっと強い香の素材が海の向こうから運ばれてくるようになりました。そしてこれは単に
香りを楽しむだけではなくて、漢方薬として紹介もされるわけです。

ここにあるのは丁子、クローブといいます。ホットウイスキーを頼むと、「レモンにしま
すか、丁子にしますか」なんて聞いてくれるバーカウンターで一杯飲みたいと思うので

すが、そのホットウイスキーに入れると、ふっと香るぐらいのものです。あれぐらいの熱で十分香るわけですね。もちろん漢方薬です。丁の子どもと書いて「ちょうじ」という屋号、名前も日本全国にあります。10年近く前に京都で丁子サミットというものが開かれたことがあります。私も呼ばれて、丁子が何たるやという話をさせてもらいました。そのときに、鹿児島から見えたおじいさまが「いや、畑さん、あんたの話を聞いてよかった。私は実は丁子の家に生まれて、これほど悔しい思いをしてこの年になった。女きょうだいはみんな嫁いで苗字が変わったのに、わしだけ長男でこんな名前を使わなければならない」と言われたのです。何を言っているのか初めは分からなかったのですが、要はその方は生まれながらにして丁の子だったわけです。日本男児と生まれるからには、甲乙丙丁の丁の子などということ、屈辱的な子ども時代を過ごしておられたということでした。

これは面白いと思いました。私からいいますと、薩摩国、鹿児島で丁子という名前を預かっておられるお家は、よほど大変な藩の仕事を預かっておられたお家だと思います。先ほども薩摩藩が木の伐採をしていた時代の話がありましたが、南方貿易で琉球を基地にしながら薩摩藩がそれを大事にしていた時代に、南方から来る丁子をお預かりになった家ではないのですかと、思わず聞いてしまったのです。

実は京都にも丁子屋町という町名があります。ちょっと調べていただくと分かりますが、丁子は日本刀の手入れをするときの油を取る大事なもののなのです。そういうものが古くからわが国に伝わって、こういうものをいかに配合するかというノウハウ、私はいつもハードウェアとソフトウェアと言うのですが、物そのものとそれを使いこなすテクニックが大陸からわが国に教えられて、それを1400年ほど私たちは楽しみ続けているのです。

皆さんが例えば香辛料としてこういうものを楽しんだり、漢方薬としてお使いになったり、そして松栄堂の香としてお買い求めいただいたりすることは、すべて熱帯多雨林の恵みを享受しているということです。その中で、先ほど湯本先生のお話にもあった沈水香木、水に沈むほど重く、香りの非常にふくよかな沈香というものが日本人にとっては非常に大切な香の材料として見つめられてきたということになります。

今日は一つ現物を持っています。少し暗い会場ですが、手に持ってください。ちょっとずしっとする質感です。私の話よりもその方が面白いだろうと思います。

何度も申し上げますが、熱帯多雨林の恵みを私たちは調達しないといけないわけです。考えてみますと、父の世代や私の世代では自由に東南アジアへ旅ができるようになり、現

地の人と直接交流もできます。[図11 \(36ページ参照\)](#)の写真は20年ほど前にちょうどベトナムがドイモイを始めて、ようやく私たちが自由に旅ができるようになったところで、89年と書いていますが、ニャチャンの町でもこのようにして直接取引ができました。今は残念ながらもうベトナムにはこういう風景は全くありません。このような品質を産み出す森林の力がもうなくなってしまっているのです。その代わりに、プランテーションが進み、もっと品質の低いものですが、ある程度計画的な集散ができるようになりつつあるというのも実情です。

何度も「日本の伝統的な歴史に育まれた」と申し上げましたけれども、日本の歴史を学ぶ中にいろいろなヒントがあります。私はこういう錦絵 ([図12 \(36ページ参照\)](#)) の中にお香が焚かれていると「あっ、やった」と何べんも引っ張り出しては眺めるわけです。そして、これぐらいの大きさのお盆にこういう香炉を乗せて焚いてみようなどとやるわけですが、何べんも眺めていますと、ふっとここにこんなガラスの板みたいなものがあることに気が付きました。あれは雲母という石を使っているのですが、雲母の板を使うときは、煙が立ち昇ると温度が強すぎて失敗なのです。ということは、これはまさか失敗の様子を描いているわけではなくて、「ああ、そうか、香りを描いていたのだ」と分かるわけです。煙と見てしまっていた私が間違いで、香りというものは絵に描かれていると煙に見えてしまうのだということを教えてくれた錦絵です。私はそれからというもの、こういう絵を見ると、これは香りなのか、煙なのかと考えるようになって、香りだと見るべき絵にたくさん出会ってまいりました。

今、結論的に考えているのは、浦島太郎の玉手箱は絶対に煙ではなくて香りだったと私は信じていて、こういう機会にぜひ呼びかけておきたいと思ってお話しするのですが、いつも妻には「それだけは言うのをやめて」と怒られているのです。

歴史の面白さの一つとして、[図12](#)にある短冊には実は「源氏後集余情」と書いてあります。ずっと読んでいて、あるところで、これは「源氏五十四帖」と読むべきだったということに気が付きました。どうしても私たちは、「源氏五十四帖」と書かないと試験で丸をもらえませんから、こんなふうにしかならないわけですが、すごく楽しいパロディなのですね。「後」ろに「集」まる「余」った「情」けと書いて「ごじゅうよじょう」と読ませているなんて、次のページをどうしてもめくりたくなるではないですか。「五十四帖」だったら、「また古典の授業か」みたいにしか思わないのです。歴史あるいは古典は、もちろん専

門的な学術的な取り組みの見方も大事ですが、庶民としての楽しみ方も学ぶべきだとつくづく思っています。

私たちの文化として育まれたお香は、先ほどの香木を米粒の半分ぐらいに小さく削って雲母の板を使って柔らかく温めると、えもいわれぬ不思議な香りがふっと立ち上がります。香木というのは天然の素材ですから、私たち一人一人の人間が一人一人の生い立ちや個性を持っているのと同じように、天然の木が一つ一つの香りの個性を持っています。そういうことを見出したのがわが国の美意識です。この京都で500～600年前から人々はそういうことに非常に注目するようになったわけです。

『源氏物語』の書かれた1000年昔に光源氏はまだそのことは知らなかったわけです。そのようなことを考えると、順番を追って歴史を見つめていく面白さがあるといつも思っています。そして、中国の古典あるいは仏教用語から、香を聞く「^{もんこう}聞香」という言葉まで使うようになったわけです（[図13（37ページ参照）](#)）。

今から500年ぐらい昔に東山の銀閣が建てられたころから、人々は空間と時間を共に享受すること、共有することの面白さに非常に注目するようになりました。寄り合うということですが。

私の母の実家が京都の京北にあるものですから、私も子どものときから京北と縁をいただきました。行くと囲炉裏端で一杯飲みながら話を聞かされたりするわけですが、私の叔父に「いいよな、叔父さん、こんな自然いっぱいのところにおいて生活できて」みたいなことを言ったときに、「おい、正高、おまえが見ている山々の周りの景色はみんな自然と思っているやろ。違うんや。みんな人間がかかわっている山なんや、生活風景なんや」と言われて、なるほどと考えさせられたことがあります。

それが里山という言葉に当てはまるということも後になって知るわけですが、実は私は今日現在こんなことをしてはいけなはずなのです。どういうことかといいますと、10月の10日頃は山を歩いてマツタケを探さないといけな日です。しかしながら、もう5～6年はこの時期の山に入っていません。行っても意味がないのです。先ほどの湯本先生の写真では田んぼに柵がしてありましたが、私どもの山にも柵がしてあります。シカにマツタケを取られないように、食べられないようにしている場所があったりします。しかし

ながら、もちろんご承知のとおり、山もすっかり変わりました。

[図14 \(37ページ参照\)](#)は木馬道の跡です。私が高校生ぐらいのときに北山を歩いたときは、木馬道の上を歩くのがちょっとスリルがあって楽しかった記憶がいっぱいあるのですが、今日北山で木馬道の上を歩く場所をもうほとんど私は知りません。写真のような状態で、よく見ると釘などもまだ刺さったままになっています。

それから、残念ながら雪害があります。毎年、雪が降ると多くの木が傷んでしまいますし、大変なことに松枯れで京北の山も完璧にやられてしまって、荒れてしまっているのが実情です。私がこんな山にかかわるのは何故かという、地元の方にいろいろなことがあって、私の母がこの山を預からざるを得なくなり、そのことで私も母と一緒に山のことを少し考えないといけないという現実があるからです。

しかしながら、できる範囲のことはしたいということもあり、森林組合に相談させてもらったり、土地の方をお願いしたりして新しく植林をしたりしました。それから、手入れの行き届いている山であれば、非常にきれいな部分もちろん今でもあるわけです。何もかもが悲劇的な状態ではありません。

しかしながら、残念なことに、ここ植えてもらった木はヒノキやスギなどのたぐいなのです ([図15 \(38ページ参照\)](#))。本当は広葉樹などを植えていきたいと思っただけですが、なかなか現場の方との意見が合わなくてそうになってしまうのです。このようにまでするともちろんきれいですが、ここまでにするのは大変なことです。

北山と縁のあった私どもはまた、京都の長岡京に工場を持っています。長岡京の新幹線のガードの下に[図16 \(38ページ参照\)](#)のような水場があります。ここは自転車が放ってあったり、ドラム缶やいろいろなものが捨ててあった場所だったのですが、そこにオグラコウホネという絶滅危惧種が自生していることを知り、会社のみんながこの川の清掃にボランティアでかかわってくれたことから、長岡京市の自然保護の方々との縁が深まりました。そして、オグラコウホネという本当にか細い水生植物の自生地を守るという取り組みに参加するご縁をいただいたわけです。

もう一つは、これも人の縁なのですが、私たちは一回で分かったようなことを言って、香料を調達をして、相場を作って、品質を見たりしているのですけれども、やはりその香料にとって本当に育まれている環境がどういうものか、身をもって体験したいという願いもあります。自分たちが熱帯雨林へ行って採取したいとは全然思いません。それはできるはずがないと知っているのです。しかしながら、それがどういう場所なのかということも身をもって体験したいということから、先ほどの湯本先生のお話にあったサラワクに私も入る機会をいただきました。

私どもの女子社員の一人が、たまたま大学のときにインドネシア語を勉強していて、休みを使ってそちらの方に行ったことがありました。彼女は帰ってくると私の机に来て、「1週間、時間を取ってください」と言うのです。「何？」と言ったら、「絶対に行かないとあきません。自分で行かないとあきません」と言うのです。私は「自分で行かないとあきません」と言われて、そんなことを言われたら、こっちも意地になって「なら、行くわ」と言って、手帳にバツと線を入れて行ったのがこういうことになっていくのです。なるほど、身をもって体験することの意味を本当に知らされました。今こうしていても、あの現場でどういう雨が降るかというのは、やはり行ったからこそ分かることです。

これは本当に次の時代を担うみんなが体験しないといけないと考えるようになり、日本の普通の言葉で言うとホームステイなのですが、サラワクのロングハウスで体験生活をさせてもらうというプログラムを会社としても作って、10人ぐらいのチームを送ることになりました。写真の中に何人も私どもの会社の社員がいるのですが、どれが誰か分からないぐらい溶け込んでいます。やはり行ったメンバーの目の輝き、開き方はいっぺんに変わります。

それと同時に、今度は地元の京都の方でモデルフォレスト運動というものが京都府の提唱で始まり、私どももちろんそれに参加するわけです。ご承知のとおり、地元の材料を利用して、それを生活で享受して、同時にまた地元の木を植えていこうという運動です。私が学生のころはカナディアン・ログハウスを建ててみたいというのが夢でしたけれども、今、京都でカナディアン・ログハウスを建てたら「何考えているんや」みたいな話になります。今はやはり京都府下の材料を使って生活の中で森林に親しむというのが、先ほどのクールという世界になるわけです。

それからもう一つは、これも社内の若い人たちの提唱ですけれども、グリーンウェイブというプログラムに意識をとめて参加するようになりました。これは、5月22日朝10時に緑に親しもう、できたら木を植えようというプログラムです。22日の朝10時にやりますと、それが24時間で地球を1周します。それがわあっとサッカー競技場でやるようなウェイブになるわけで、だからグリーンウェイブです。皆さん、ぜひ来年の5月22日朝10時に参加してください。インターネット上にそのサイトがありますから、そこに写真を1枚貼り付けて、「私たちは何をした」と言うと、ダーッと24時間の間に地球上に木がいっぱい増えていくというサイトに参加できるということです。京都の北山に入って、私たちは木を植えるのではなくて間伐をして、丸太づくりに取り組んだりしています。

木を切るなどというのも素人が突然できるものではありません。ご指導いただいて、危険ももちろん管理しながらするわけです。人間の手で切るわけですから、本当に寄ってたかってやっと5本ぐらい切ってふうふう言っているというのが実情です。それで丸太を作って、この丸太をまた乾かして、半割りにしてテーブルができたというのが今年の取り組みです。

それから、シカ肉を食べるというものもあります。これも今の私たちの国の森を考えるという大きなテーマで、鳥獣害の問題を常に体感するために、わざわざシカ肉を準備して料理をしてみんなで食べたりしています。

もう一つは、先ほどのモデルフォレスト事業で京都府下に木を植えることです。京都府下に木を植えようという企業や人々はたくさんいらっしゃるのですが、1000本の木でなくても、100本の木でもいいし、ひよっとしたら50本でもいいから東南アジアに植えようということで、わざわざインドネシアの山やベトナムなどへ出かけて行って植林をするわけです。別に木を植えてその木は自分たちの木だと主張するつもりは全くありません。一番大事なことは、その土地の人々の生活を体感することだと思います。チームを組んで現地の大学の研究者の方たちと一緒に、また現地の作業員の人と一緒に木を植えるわけです。

私たちが植えている木は、実は「母樹」です。次の苗を生んでくれるための木を植えているという、気が遠くなりそうな話なのですが、それが先ほどの湯本先生のお話にもあったボルネオ島などの現状です。まず植えるための苗づくりのための植林をしないとイケないのです。

こういった取組が伝統文化といわれる本来の私たちの仕事において、目に見えないところで大きな説得力に変わっていくだろうと思いますし、私自身は日本の伝統文化というものの継承あるいは啓蒙を続けていかないといけないと思うわけです。

それから、また違う意味で異文化との相互理解を図るために、ヨーロッパやアメリカの方々と実際にお香の香りを体験するプログラムを提供したりしています。例えばイタリアのボローニャの大学でさせてもらったりしましたが、非常に興味を持って体験に集まってくださるわけです。

できることはいろいろとにかく実践してみようということで、[図17 \(39ページ参照\)](#)も京都府のプログラムに賛同して参加しているものです。いわゆるインドネシアのテキスタイル、バティックやルリックという名前の素晴らしい染色品がありますが、これを私たちが向こうで支援するよりは、向こうの人々の暮らしで生み出されるものを日本のマーケットで少しでも紹介して日本人が生活で使ってくださいたら、その方が現地の人々の励みになるという考え方で、私たちはこの裂を使って匂袋を作ったり、お香を入れるケースを作ったりしています。実はこれを百貨店の店頭に並べてもらおうと思うと、テキスタイルの品質基準が全然合わないのですね。やはり今の日本のマーケットでは、そのまま市場に流すことはできません。そういう意味で、説明を付けて私たちの手の届く範囲内で紹介していく、あるいは日本で少し加工して、一般商材として使える基準にしてから提供していくということまで考えながら、先は長いですが、一助になればと思って取り組んでいます。

いずれにしても、日本の伝統的なお香という仕事を繙いてみると、1400年もの歴史の中で今日私たちがそれを生業にしているという現実気付かされます。そして多くの方々に私たちの品質を安心して、信用してお使いいただいています。それを次の世代まで引き継いでいくためには、私たち自身が地球規模で物を考えて体感しながら、大きな視野の中で自分自身を見つめる努力を続けないといけないと思います。そして一緒に汗を流す中で、物を感じられ、体感できるチームを育み続けたいと願っているわけです。

私の今のテーマは、今のようなプログラムに熱心なごく一部のメンバーだけを対象とするのではなく、若い人から年齢の高い人まで、普段そういうアクティビティの経験があま

りなかった人まで含んで、みんなで会社のプログラムとして楽しんでいけるように裾野を広げることになりつつあります。どうぞお気づきのことや、また、こんなチャンスがあるということがありましたら、ぜひお聞かせください。いろいろな意味で挑戦していきたいと思っています。



図10 「香の原料 草根木皮」(松寿文庫蔵) [\(本文へ\)](#)

ベトナム中部 ニャチャンの町で



図 1 1 「ベトナム中部 ニャチャンの町で」(松寿文庫蔵) [\(本文へ\)](#)

伝統的日本文化 香



図 1 2 「源氏後集余情」(松寿文庫蔵) [\(本文へ\)](#)



図 1 3 「聞香」(松寿文庫蔵) [\(本文へ\)](#)



図 1 4 「木馬道の跡」(松寿文庫蔵) [\(本文へ\)](#)



図15 「植林・間伐・枝打」(松寿文庫蔵) [\(本文へ\)](#)



図16 「絶滅危惧種オグラコウホネ」(松寿文庫蔵) [\(本文へ\)](#)

社会の一員として 企業の取り組みを考える



インドネシアのバティックやルリックで匂い袋

図17 「インドネシアのバティックやルリックで匂い袋」(松寿文庫蔵) [\(本文へ\)](#)

講演「未来の森林づくりに向けて：行政の立場から」

末松 広行（林野庁 林政部長）

最初の部分は、先生方のお話を行政としてどれだけ理解できているか試験を受けるようなつもりでご説明いたします。それから、国としてどういう方向でこれからの森林行政、林業行政を進めていくか。これはいろいろな考え方があって、必ずこうだというわけではないのですが、私の考えを含めてご説明したいと思います。

先ほど話がありましたが、世界の森林をめぐる状況と日本の森林をめぐる状況は、同じ面と違う面があると思っています。そもそも論で考えてみますと、森林は世界の土地面積の約3割を占めています。3割あるのが多いのか少ないのかといういろいろな評価がありますが、1700年代には地表の半分ぐらいが森林だったといわれていますので、今はどんどん減っているということです。

環境での関係で言えば、世界の森林は1兆トン以上の炭素を貯蔵しており、世界の二酸化炭素排出量の2割は森林減少に由来しているということです。世界の中では、森が減っていくということがすごく大きな問題であるということです。

[図18（50ページ参照）](#)は、今、世界の森林面積がどこで減っているかを示したグラフです。よく言われるように、20年前から10年前ぐらいまでは平均でいくと1年間に森が800万ha減っていて、今は1年間に500万haぐらい減っています。これは差し引きです。500万haというのはどのぐらいの広さかというと、日本の農地面積が461万ha、約500万haですので、毎年、日本の田畑を全部合わせたぐらいの面積が、世界の中で森林からほかのものに変わっているということになります。

先ほどボルネオの話もありました。世界の中では森林が減っているということが非常に大きな課題になっています。

先ほどのお話と重なりますが、1992年の地球サミットで、これから地球環境は何が大切かということでいろいろな議論が始まりました。砂漠化の話、地球温暖化の防止の話、生

物多様性の保全の話、それから森林の話ということです [\(図19 \(51ページ参照\)\)](#)。ほかのものは守るとするのが基本的なコンセプトになるのですが、森林については、なかなか森林保全条約ができなかったという話もあります。「森林の保全と持続可能な経営」と書いてあります。森は単純に守ればいいのではないかとお思いになるかもしれませんが、森は守っていくとともに、持続可能に経営していくことも大切だというのが現時点で世界でのコンセンサスになっています。

今年は国際森林年ということで、世界中で森の大切さをもう一度考えてみよう、いろいろな取り組みがされています。実は私はこの国際森林年の担当で、「国際森林年を知っている人はどれぐらいいますか」と最近よく言われるようになりました。最近言われるようになったというのは、マスコミの方などが国際森林年であるということを知って、それなのに国はそれほどいろいろなことをしていないと思ってくれたからだと思っています。

ちょっと内輪の話をしますと、最初はいろいろ考えて、認知率を2割にしようとか言っていたのです。国際森林年の1年間で国際森林年というものを覚えてもらうことに価値を見出すという考え方もありました。実はいろいろな広告代理店の方などと議論すると、認知率が広報の効果測定には大切だと言われたのです。しかし、多分今回は違うのではないかと思います。一人でも多くの方が森林を具体的に体験してみるというのが大切ではないかということです。いろいろなイベントで一人でも多くの方に森に入ってもらい、森のことを考えてもらうという機会を増やそうと思っています。

ちなみに先生方はご存じの方が多いと思うのですが、今年はまだ一つ「国際〇〇年」というものがあるのをご存じでしょうか。今年には国際化学年でもあります。ご存じない方も多かったのではないかと思います。国際化学年であることを皆さんが知ることがプラスになるかという、そうではないと思いますし、国際森林年も、みんなが知っているからえらいというわけではなくて、一人でも多くの方に森林を体験していただくことが大切だと思います。

幸いにして、例年に比べて何十万人も多くの方に森のツアーなどをしていただいで、森のことを考えていただいています。森のことを考えていただくと、いろいろなことを考えていただくことになります。今の森のあり方はおかしいのではないかと、でも、ここまでやってきたのではないかなど、いろいろな意見が出ます。そういうものが次の森林を作っていくのだと思っています。

国際森林年のロゴマークはこういうものです [\(図1 \(11ページ参照\)\)](#)。これも日本のマークを作ったらいいのではないかという意見もあったのですが、そういうものにお金をかけるよりも、一つでも具体的に森に入ってもらうプロジェクトを進めようということをやっているつもりです。

ここから少し先ほどの先生方の話とかぶりますが、[図20 \(51ページ参照\)](#)は滋賀県の写真です。先ほど六甲の話がありましたが、わが国は森林が昔から豊かだったわけではないということがわかります。私が法学部で勉強したときに、入会地の法制など、日本独特の法律の仕組みがありました。限られたものは、自分のものでもあり、自分のものではなくて、みんなで入り会いながら使っていこうということで、そういう権利調整をしてきたわけです。限られた森林の資源を、まきにするなどしてどうやって分け合うか、どうやって権利調整をするかということであって、豊かな自然の中で好き勝手に取れる状況ではない時代がずっと続いていたということです。現在は割と豊かになっているということです。

[図21 \(52ページ参照\)](#)を見ると、わが国は世界有数の森林国ということになりますし、森林の蓄積量も今は増えています。森林の蓄積量というのは森林の面積ではなくて、いわゆる体積に当たるものです。昭和41年と今(平成19年)を比べてみると、2倍以上になっているのがお分かりになると思います。これは森の体積が増えているということです。最初の阿部先生のお話で、日本は7000万立米ということでした。8000万立米とか、1億立米と言う方もいらっしゃいますが、それだけ蓄積量が増えています。

蓄積量が増えている分だけ使うということが続けば、日本の森は全く減らずに、それでいろいろなことができることとなります。日本で木材を使っている量は、リーマン・ショックの後、今は6000万立米など少し下がっていますが、大体8000万立米ぐらいです。理論的には、1年に太陽が照らしてくれて木が光合成で太ることによる恵みだけを使って、日本の木材需要は全部賄えるということになります。

今、人工林もだんだん年を取った木が増えています。これは見方が二つあって、年を取りすぎて使えなくなった林という見方もできますし、今が切りごろという見方もできます。

では、なぜこういう状況になったのか、それから、こういう状況になったのはいいことなのか悪いことなのかということについてコメントしたいと思います。

昭和 30 年ごろに国産材の自給率が 100%に近い時代がありました。それから、木材の需要が増えるに従って国産材の供給が増えていけば自給率 100%のままだったわけですが、逆に国産材をどんどん切らなくなってきました。これによって日本の山は数字的には豊かになったということです。

外材というのは、どこかの国の森を切って日本で使っていたというものです。端的に言うと、森は豊かになってきていて、今は 1824 万立米しか使っていないのですが、これをもうちょっと切っていく。切っていくと、先ほど言った 8000 万立米を超えれば日本の森が今度はだんだん減るということになります。そうならない範囲で進めていくことができるわけです。

国産材がどんどん減っていった理由はいろいろあります。関税だと言う方もいっぱいいらっしゃいます。木材については一番初めに関税が撤廃されました。それにより安い外材がどんどん入ってきたという面があります。

もう一つ、国内の森林も、戦前の切り過ぎや、戦後も秋田のスギなどいろいろな天然林をどんどん切ってきたということがあります。その反省で国内の天然林をあまり切るのをやめていこう、森林は保護していこうということで、自ら保護の観点から切るのをやめた面もあります。そういう影響で間伐などが進まずに荒れた森が増えてきているということが実態としてあります。先ほどから森の資源が増えてきているというプラスの話をしてきましたが、森の資源が増えていても、その増え方が今、日本では問題があるということです。

世界の話にもう一度戻してご説明しますと、世界では絶対量が減っている、森林の面積が減っている、この減りを抑えることが世界のためには必要です。日本では絶対量は減っていないのです。しかし、うまく管理できていないという問題が明らかになってきて、それを何とかしていかなければいけないというのが今の状況です。

では、どうすればいいかということです。いろいろな考え方がありますが、一つ参考になるのがドイツ、オーストリアの例です。林業関係者の方とドイツ、オーストリアの例の話をする、「ドイツと日本は違うのだ。ドイツのものまねをするのではない」とおっしゃる方がいらっしゃいます。日本流にしなければならぬことがあります。基本的な課題をご説明するにはドイツの例はすごく参考になると思います。

ドイツは森林面積が 1000 万 ha、日本は 2500 万 ha です。ただ、ドイツはほとんどが人工林なのに比べて、日本はこの 2500 万 ha のうちの 1500 万 ha がいわゆる天然林的なものです。スギ、ヒノキなど、人工林施業できるようなものが 1000 万 ha ぐらいです。そういう意味では、少なくともドイツと同じぐらいの林業ができる森があるのが日本だと思っていただければと思います。

そういう中で、ドイツは木材生産量がこんなに多くて、木材を輸出しています [\(図 2 2 \(5 3 ページ参照\)\)](#)。それには二つの理由があります。一つは、道がたくさん入っているということです。これは空から見てこのように見えるわけではなくて、道が描いてあるところは白で上から塗ったのですが、こんなふうがたくさん入っているわけです。路網密度が 1ha 当たり 118m です。一方、日本は 17m しか入っていません。たくさん道が入っていると何がいかというと、そこまで機械で行って、道の両側の木を簡単に間伐できます。入っていないと、人手が要ったり、架線を使うなどいろいろなやり方をしなければいけないので、たくさん道が入っていると、林業をするときに非常に効率的なのです。

オーストリアも日本と同じようになりかなり山がちです。やはりオーストリアも等高線に沿って 1ha 当たり 89m の道を入れています。ですから、非常に単純化していくと、日本もきちんと機械化して路網の密度を上げていくことで、これからの林業を再生していくことができるのではないかとと言えるのです。

では、なぜしなかったのかということがあります。森林の保護や、全体のいろいろな動きの影響もありますが、道の話に関して言えば、役所にも大きな反省があるのです。林業をするための道は、機械が入れればいいので車は通れなくてもいいし、ガードレールはなくてもいいのです。けれども、今まで林野庁が道を造るときには割ときちんとした道を造っていました。車が通れて、たまに舗装したり砂利を敷いたり、またガードレールがないと車が谷底に落ちると困るという考え方で造って行って、大体 10 倍、20 倍かけてきたのです。ですから、機械のためだけの道だと思えば、同じお金で 10 倍の長さができるということになります。

ちなみに言い訳をさせてもらおうと、基本的に今年の予算からは、こういう作業路みたいな予算だけになっているのですが、そうすると、やはり各地方の方々から非常に評判が悪いのです。私も田舎の市役所に出向したことがあるのですが、作業路もいいのだけれども、何軒かある集落があって、あそこの集落とこの集落を結ぶ道が欲しい、でもなかなか造ってくれないと言われるわけです。林野庁などは山村のことが分かっている、ここの生活道

ができる人々がどれだけ喜ぶか、ここにトンネルを掘ってくれれば非常にありがたいという希望がずっとありました。そういう希望と、林業の集約的な施業のための道をどう優先するかというせめぎ合いがあります。議論の末、今は施業のため、林業のための道造って、太い道はもう造らないと決めたわけですが、それで本当に皆さんに納得していただけるかということはこれから考えていかなければいけないと思っています。

そういうものを含めて、これから森林・林業再生をどうしていくか。これはもう非常に単純なのですが、みんな集約してやりましょうということです。いっぺんに大きなところを順番にやっていきます。大きなところを全部ばさっと皆伐するのではなくて、大きなところを間伐するのですが、集約してやることによってコストがものすごく下がります。

それから、道をきちんと入れていくことです。道は一度入れると、そのうちのいくつかは崩れますが、10年後にまた使えます。そういう投資を山にもう一度きちんとして、再生可能・循環可能な林業をしていこう、それから、機械も使おうということです。

日本の林業者はすごく進んでいるところもありますし、丁寧な施業できちんとやっているところもあります。いいところがいっぱいあるのですが、単純化していくと、1日に木を切る量がドイツの半分から3分の1です。ドイツの作業員の方々が2倍、3倍切れば、2倍、3倍の賃金がもらえて生活ができます。

昨日も京都府下で見せていただいたのですが、非常に先進的な施業、森林の作業は頭も使います。どの木を残すかなど、高度な技術と将来を見据えた判断で森を作っていく必要があります。これは極めて重要な仕事であり、かつ能力や技術も必要だと思います。そういう林業者の方々を増やしていくということがこれからの国のやるべきことだと思います。

それから、その後、木をきちんと使ってもらおうということも大切だと思います。使ってもらおうことについては後でまた説明させていただきますが、木は昭和20年代に使うのをやめようと国がいったん決めたことがあるので、それを戻すというのが今の課題です。

少し国際森林年の話をさせていただきたいと思います。

国連のマークを使わせてもらって、各地でいろいろなイベントが動き始めています。できるだけ多くの方に森に入ってもらって、森を考えていただくことが大切だと思っています。

す。国際森林年を契機として、もう一度、国民と森林を結びつけられないか。森林・林業再生元年として弾みを付けられないか。世界の森林の持続可能な経営に貢献できないか。先ほどお話で出た REDD のように、日本の貢献が非常に求められているところで一生懸命やろうとしているところです。

ちょっと脱線しますが、日本の林業協力は非常に評判がいいのです。林野庁の職員もラオスやカンボジアなどに2~3年行っていますし、先生方もいろいろなところへ行っていますが、評判がいいのです。これはブラジルの人と私が会話をしているときに実話で体験した話で、アメリカやヨーロッパだとこんな会話になるのです。「アマゾンを守らなければいけない。これからアマゾンの木は切ってはいけません。そういうことにブラジル政府も大きく舵を切るべきだ」。こういう先進国だと当然だと思うような議論が出ると、ブラジル人は怒るのです。どうして怒るかというと、「アメリカもイギリスも、ヨーロッパも広大な森林地帯を全部切って町にしたり、畑にしたりして、あなたたちは文明を発展させてきたのだから」というわけです。最初に申し上げたように、世界の陸地は5割が森林だったのが、今は3割になっています。「その残っている途上国の森林をわれわれが同じように切って、プランテーションでも何でもして経済的に発展していこうというのに、なぜおまえらは反対するのだ。自分たちのところを全部森に戻せ」という議論になります。

そういう話を聞いていると、どちらもそうだなと思います。だから、先進国は途上国の森林の維持に対して協力する義務があるというのは、そのとおりだと思うのです。途上国は日本に対しては、「日本のようにちゃんと森を残しながら発展する国はいいのだ」と言ってくれるのです。しかし、本当は日本はずるくて、自分の国の木は切らなかったのですが、よその国の木をたくさん輸入したりしてきたということがあります。だから、先ほどの結論と同じですが、自分のところではできることはした上で協力もするし、少し足りないところは輸入させてもらおうということが大切だと思います。

次にお話しするのが、森林に新しい価値を見出すことができないかという木材利用の観点です。

わが国における木材利用の可能性はやはりあると思います。

火事に弱い、地震に弱い、だから木造はやめようというのが昭和20年代に政府の取った

道です。昭和 25 年には木造の公共建築物の禁止のための国会決議や閣議決定までしました。私はそのときはまだ生まれてもいないのですが、そのころは林野庁も含めて木造の庁舎などはやめようということになりました。酒田の大火などがあり、木造の建物がたくさん燃えてしまったという過去があるわけです。しかし、最近は状況が変わってきていて、きちんとした耐火のための設計をして一定の厚さの木材を使えば、表面に着火しても炭化層ができて中まで燃えるのに時間がかかるので、家が崩れ落ちることはない、逆に加熱によって鉄の方が強度がいっぺんに下がるといったこともきちんと分かってきました。

地震について言うと、この間の東日本大震災のときの津波の被害は非常に大変なものがありました。木造の家は地震に極めて強いということが証明されました。津波についても、木造の家は津波にやられたのですけれども、4 階建て以上の鉄筋コンクリートの住宅や建物に比べたら木造の家の方が弱かったのですが、2 階までの建物であればどちらも同じです。そのように木造建築の良さが分かってきました。

火事に弱くなくて、地震にも弱くないとすると、木材のいいところが見えてきたということがあります。木造の校舎で勉強すると頭が良くなって、キレイになって、風邪も引かないと私は思っています。皆さんもそのように思っていると思うのですが、そのうちの風邪を引かないということは証明されているのです。

[図 2 3 \(5 4 ページ参照\)](#) はインフルエンザによる学級閉鎖数です。RC 造り (黄)、木質内装 (紫)、木造 (緑) とあります。わざと三つ書いているのは、柱が木である必要はなく、壁が木だったらいいということなのです。インフルエンザで一冬にどのぐらいの学級閉鎖があるかということで、要するに木質が内装であれば大体同じということなのです。RC 造りだと、93 年のときは 6% ぐらいの学級閉鎖になりました。でも、木質内装と木造は 2% ぐらいだったということです。つまりインフルエンザにかかりにくいということです。それはなぜかという理由も分かっている、木材の壁だと湿度の調整能力が高く、湿度がいっぺんに上がったり下がったりしないのです。だからインフルエンザにあまりならないということです。木材にはそういうプラスの効果が明らかにあります。今日はお香の話もありましたが、頭が良くなったり、キレイなくなったりする効果は絶対にあると思いますし、そういうことがだいぶ分かってきているのが今の状況だと思います。

私は役人なので、昔、「木造の校舎は駄目だ、やめよう」と思ったのも理由があったと思

いますし、それは仕方がなかったと思います。風邪を引かないよりも、火事にならないこと、命が大切だから木造をやめようと言ったときには、それで正しかったと思うのですが、そうではないということが分かったら、木材の良さをどんどん広げていくのが大切ではないかと思います。

現在では、公共建築物においては木材利用の促進をしていこうということで法律ができました。これから建てる国の建物は2階建て以下のものは全部木造にすると決めました。これで木材の利用がどんと増えるかという、今、国は建物を建てなくなっているので、あまり増えないのです。ただ、いいと思っているのは、いろいろな設計の基準です。林野庁が「木を使え」というのは昔から騒いでいたのですが、国土交通省に官庁営繕部というところがあって、ここは役所の建物などを造る担当なのですが、そこの方が設計の基準などを直してくれるのです。

今も木造の図書館、学校、ドームなどいろいろありますが、一戸の木造の建物ができるのには1個の大きなドラマがあるのです。それはそれで素晴らしいのですが、これからはドラマはなく、市役所の担当の人が木造の校舎を造ろうと思ったり、老人ホームを木造でやろうと思ったら、指定の仕様書どおりにやればいい、発注も今までのコンクリート造りと同じにできるようになっていくはずで

各県ごとにも木材を使っていこうという指針を作ってもらっていて、47 県中 35 県できています。近畿の近県でもまだできていないところがあって、そこにも後でプレッシャーをかけようと思っているのですが、各県で自分の県の木を使って木造のものを建てるということをしていただければと思います。

いろいろな事例があります。私がぜひお勧めするのは、秋田の国際教養大学の図書館です ([図 2 4 \(5 4 ページ参照\)](#))。行ってみたのですが、これはすごくきれいでした。例えば悪いと言われたのですが、「ハリー・ポッター」の映画に出てくるような感じで、すごくいい感じでした。ここもいろいろなドラマがあって、こういうものがどれだけ建てられるか、空間はどれだけかという話などたくさんありました。

北海道の札幌のコープでは 2999 平米の大型店舗を造っていただきました。なぜ 2999 平米なのかというと、3000 平米を超えるとまた防火の基準が厳しくなるからです。1 平米を少なくすることでどうにか木造にするという工夫をしていただいたわけですね。そういうド

ラマがいろいろありますが、今後はドラマではなく事例を増やしていくことが大切だと思っています。

林野庁との関係で、農林水産省も牛舎などを補助金で造っていて、北海道でカラマツづくりの牛舎を造ってみたのです。今までは鉄骨で造っていました。鉄骨でないと燃えてしまったりして牛がかわいそうだと言われましたが、結局これを造ってみて幾つか分かったことがあります。

値段は変わりませんでした。それから、驚いたことにおいがすごく少なくなりました。全然ではないのですが、ハエが出なくなりました。「そんなのは当たり前だ」と地元の農家の人には言われたのだそうですが、それから、牛の機嫌が良くなったというのです。このように言うと、またオカルト的なことを言うと思われるかもしれませんが、これも理由があります。鉄骨が出ているときは水滴がぼたぼたと落ちるのです。木造の梁になってそれがなくなったので、牛が元気になったということです。私は、ついでに乳の出もよくなったのだでしょうと思ったのですが、実は木造で造ったのは牛を育てる方の牛舎で、乳牛の牛舎ではありませんでした。育ちは良くなったのですが、乳の出との関係は、乳牛の牛舎を造ってまた次回にぜひご説明したいと思います。木材を使うとそういういいことがあるのです。日本は一度、ずっと続けてきたきの文化を止めた方がいいのではないかと考えた時期がありました。今は戻す時期だと思えます。

ついでにもう一個、悲しい話というか、これからやらなければいけない話をします。最近、イタリアでは9階建ての木造建築が建築基準法でできるようになりました。ところがイタリアは、その基準を作る際にイタリアの中で試験ができなくて、日本に木を持ってきたのです。日本に国立防災研究所というものがあるのですが、そこでイタリアから持ってきた木を使って9階建てのビルを建てて、揺らす実験をしたのです。耐震の性能を試験する設備は日本にしかなくて、当時はまだ東日本大震災の前ですから、阪神大震災の揺れなどをやって、全く大丈夫だということを確認し、イタリアでは9階建てのビルができるようになりました。

日本でもそういうことをちゃんとやっぺいこうということです。私たちは林野庁なので、ただ「木を使え」と言うのですが、難しいのは、ただ木を使えと言うことではなくて、地震にもしっかりしていて火事にも強いという上で作っていくことです。そういうことが大切ですので、そのような試験をきちんとして、できるだけ早く日本でもこういったことを

できるようにしたいと思います。

このように考えてみると、日本の森林からたくさん木が出てくるようになったときに、日本で使う道もきちんとあると思います。本日まで説明したような取組を進めていくことによって、木の文化を育てていくことがもう一度できるのではないかと思います。

今、私は林野庁としてお話をしましたが、先ほど申し上げたように国全体、建築の関係、公共建物の関係、政府全体で木の国である日本の木材を有効活用していこうということでさらに努力をしていきたいと思いますので、ぜひ皆さまにもいろいろなご意見やアドバイスをいただければと思います。

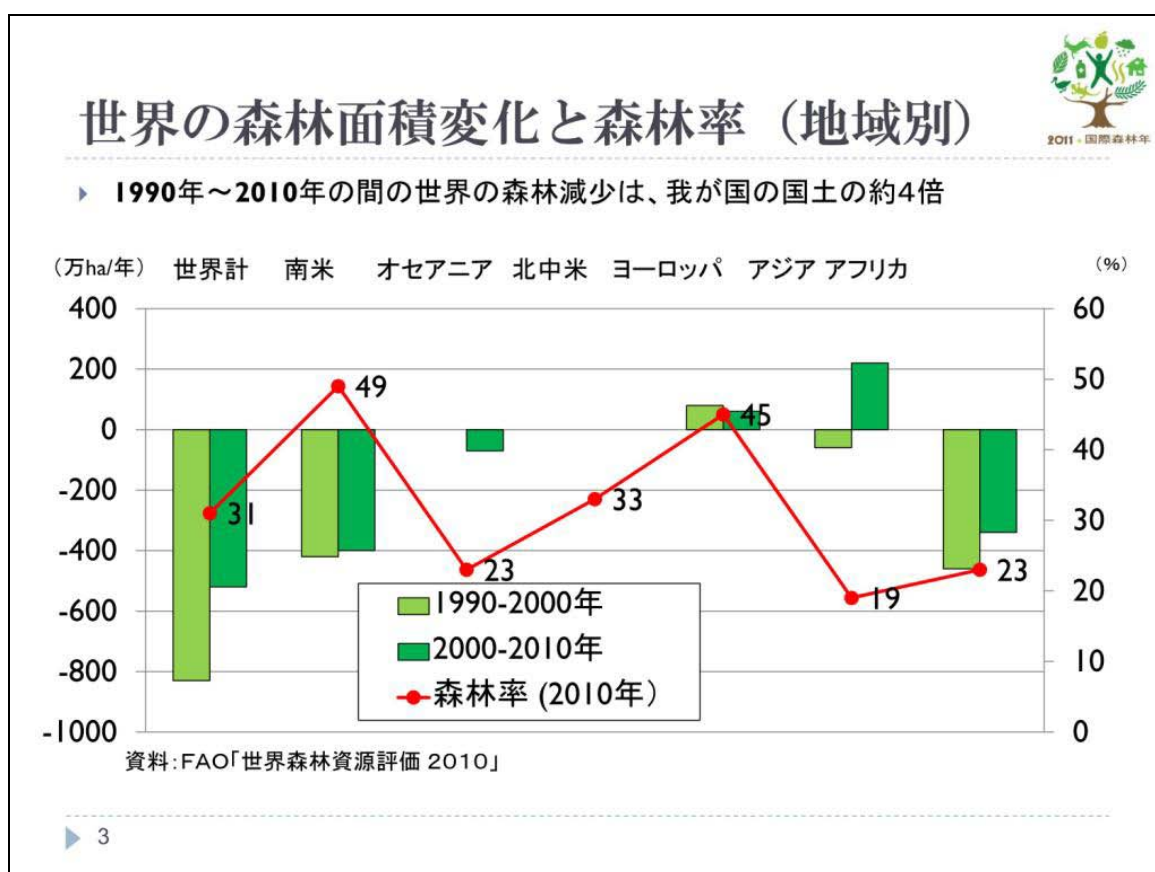


図18 「世界の森林面積変化と森林率（地域別）」

(出典：FAO「世界森林資源評価 2010」) [\(本文へ\)](#)

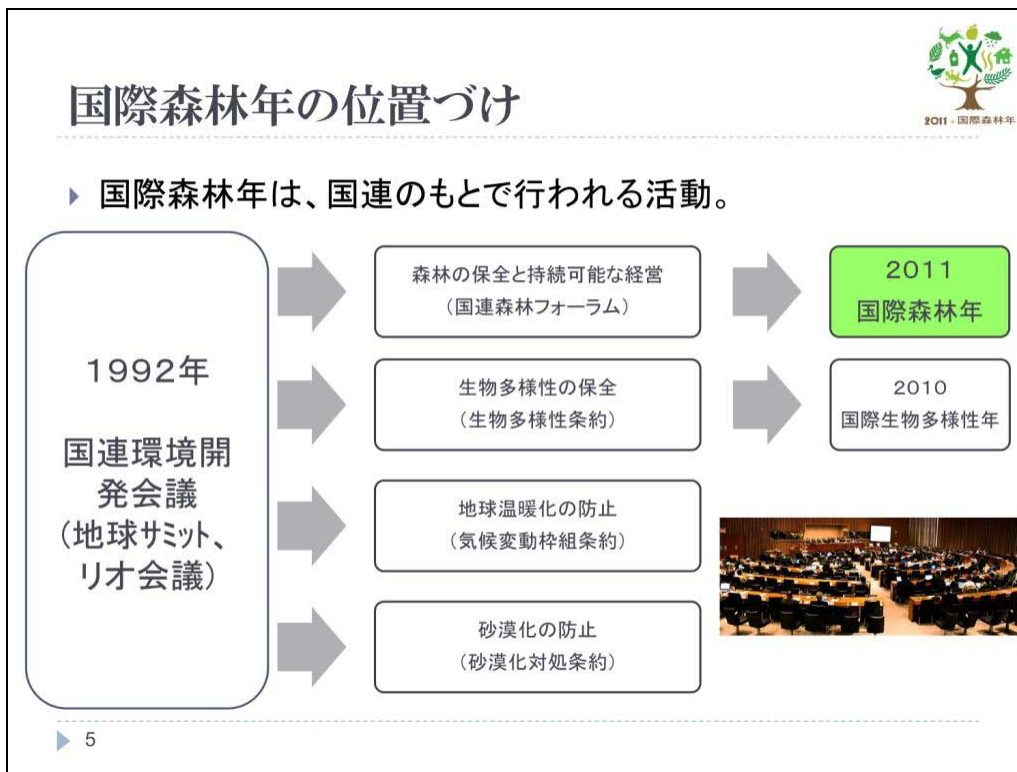


図19 「国際森林年の位置づけ」(出典：林野庁業務資料) [\(本文へ\)](#)

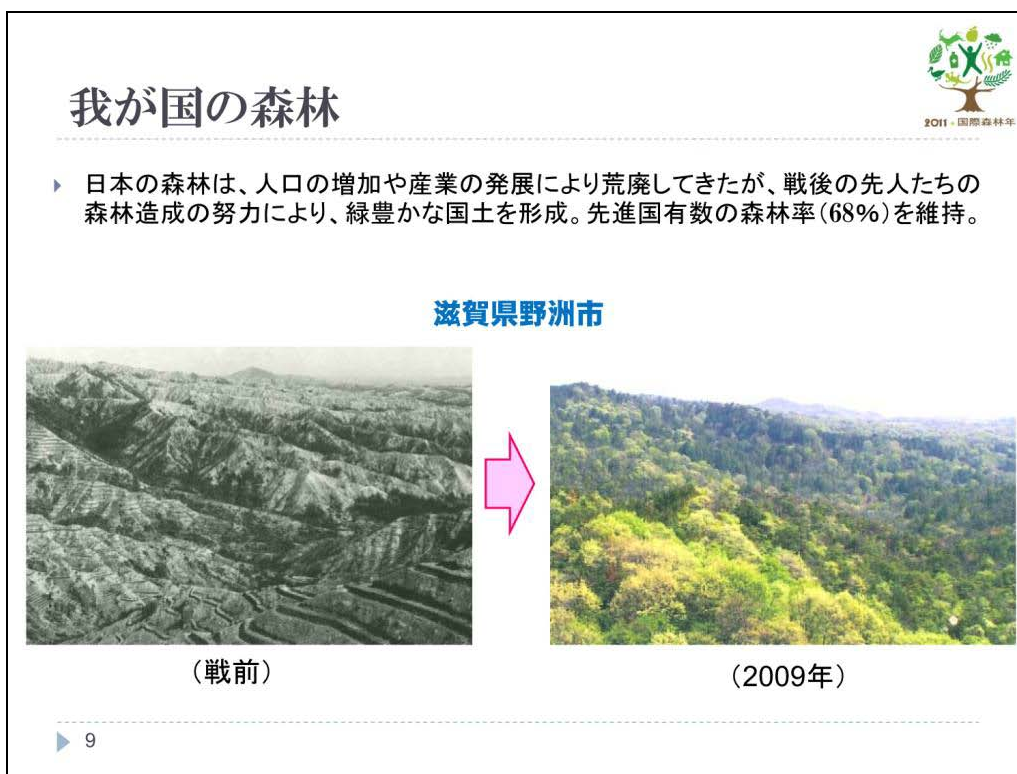


図20 「我が国の森林」(出典：林野庁業務資料) [\(本文へ\)](#)

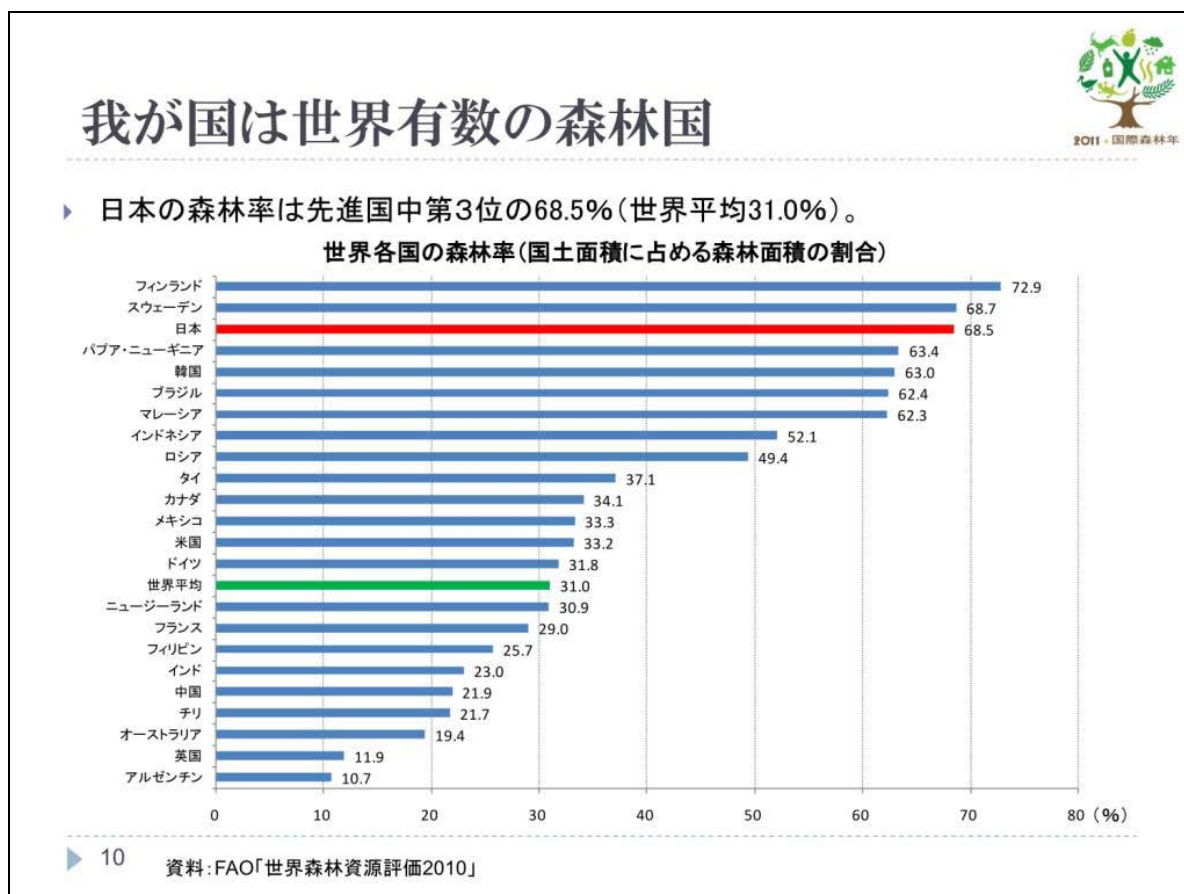


図 2 1 「世界各国の森林率」（出典：FAO「世界森林資源評価 2010」）[\(本文へ\)](#)



日本の林業とドイツ、オーストリアの林業の比較

- ▶ ドイツは緩傾斜であるという地理条件を生かして、木材を生産しているが、日本と同様に急峻な地形にあるオーストリアは、路網整備により森林資源の利用のコスト縮減を実現し、木材の輸出国。
- ▶ 我が国でも、路網を整備し、林業機械の活用など低コスト化を推し進めることによって、林業・木材産業を成長産業・輸出産業に転換できる可能性。



14 写真：Google Maps™ 地図サービス、データ：FAOSTAT2009、林野庁「木材需給表」

図22 「日本の林業とドイツ、オーストリアの林業の比較」(本文へ)

(写真：Google Maps 地図サービス) (データ：FAOSTAT2009、林野庁「木材需給表」)

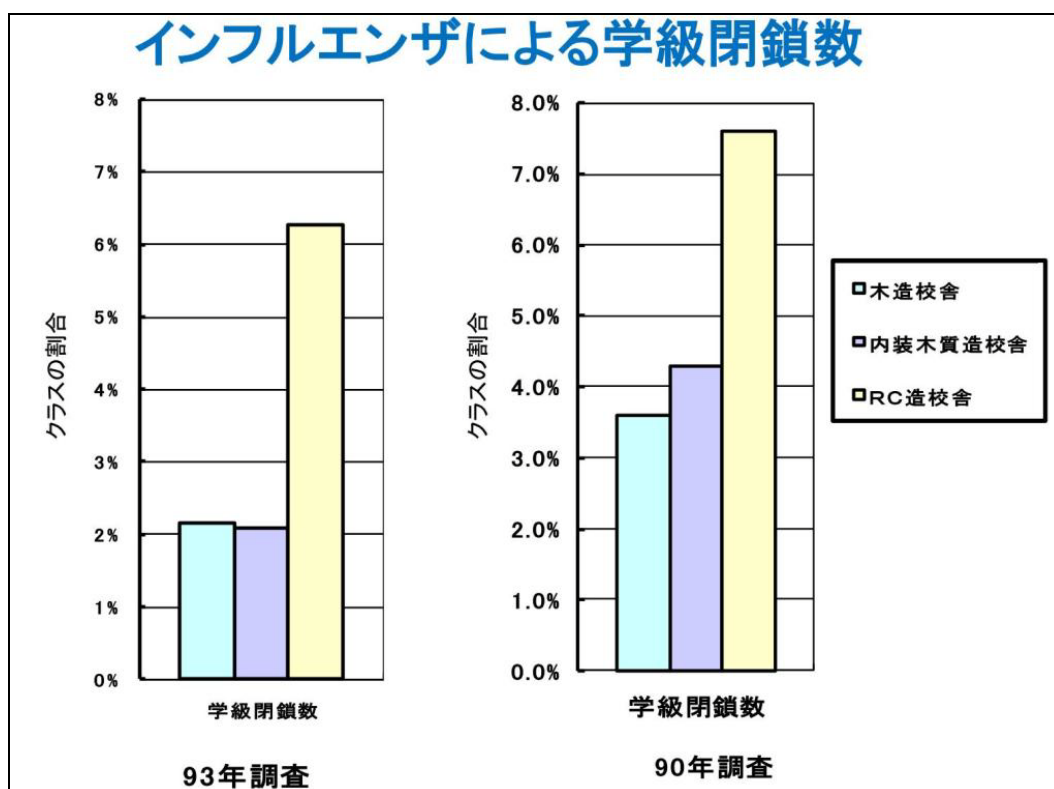


図 2 3 「インフルエンザによる学級閉鎖数」

(出典：愛知教育大学 橘田紘洋名誉教授) [\(本文へ\)](#)



図 2 4 「国際教養大学図書館 (秋田県)」 (林野庁撮影) [\(本文へ\)](#)

対談「森を身近に感じるとき」

遙 洋子（タレント・作家）

阿部 健一（総合地球環境学研究所 教授）

（阿部） 対談という形にしておりますが、遙洋子さんには皆さまの代表という形でお話をさせていただければと思います。あるいはこちらからいろいろお聞きすることもあります。今、3人の方にそれぞれ内容の濃いお話をさせていただいたのですが、そのお一人お一人の発表について「こんなことを私は考えているのだけれど」ということがありましたら、あるいは「もっとここら辺を聞きたい、ちょっと私は違う意見もある」というようなことがもしあれば、そういったこともご発言いただいて、この後、パネルディスカッションをいたしますので、そういった個々の講演者の方々にあてられた質問はまたその折にお答えいただくという段取りでいきたいと思います。よろしくをお願いします。

作家・タレントという紹介をさせていただいたのですが、実はどうご紹介すればいいのかと思っておりました。作家というのは、『東大で上野千鶴子にケンカを学ぶ』でしたか。

（遙） けんかを学んだわけではないのです。学んだのは社会学なのですが、たまたまタイトルがそうになりました。

（阿部） 私も読ませていただきました。もう何年前でしたか。

（遙） 10年ぐらい前になります。

（阿部） ああ、そうなりますか。いろいろ衝撃的な内容でありまして、嫁さんには読ましたらあかんなと思って。

（遙） ご賢明なご判断だと思います（笑）。

（阿部） 昨日の晩ちょっと書棚を探したのですが、見つからなかったのです。あれはどこかに隠したはずで、そのまま見つからなくなっています。それ以降もいろいろご執筆活

動をされています。皆さんのお手元にパンフレットを用意しております。そこにもすてきな文章を書いていただきました。これを基に、またさらに深く遙さんの考え、森に対してどのようなことを今、思っているのかを聞いた上で、また個々の講演者の方々にご質問いただければと考えています。

まず、「私は海と森といえば、断然森だ」ということを最初に書かれていますのですが、お生まれになったのは山の中ということではないのですか。

(遙) ではないです。大阪の庶民の町のだ真ん中で生まれました。将来は大阪のおばちゃんになるべくして育ったような町中です。

(阿部) 具体的にはどこだったのですか。あまり森には近いところではなかったのですか。

(遙) 全然違います。本当に大阪市内の。

(阿部) そして海よりも森だと思われたのは一体どういったところなのでしょうね。

(遙) タレント活動をしているときにあちこちロケに行かせていただくのですね。今の時代ではあまりロケのお声はかからないのですが、20代のころはもうロケ三昧で、あちこちの海や山に行くわけです。そこでリポーターとして活動していた時代が10年ぐらいあります。森に、山に、そして海に、川に、あちこち行かせていただいたときに、ものすごい発見をしました。

(阿部) 発見というのは？

(遙) 20代のころでしたので、私は恋もしておりまして、結婚のあこがれも大変強く抱いていた世代だったわけです。皆さんから失笑が出るぐらい、今では似つかわしくない夢になってしまったのですが、当時は本気だったのです。その私が振られたわけです。振られたときでもロケはあります。朝から食事もできず、当時の私は振られて、結婚も流れて、死にたいと思っていたわけです。そういう思いのときに、京都の山奥のロケに行ったらカヌ

一に乗ったのです。死にたいと思っているのに、山の中に入ってカヌーに乗っていたら、自然と笑いがこみ上げてきたのです。「何なのだ、これは」と思いました。森に入ったら元気が出たのです。

弱っているときに海に行ったら、おぼれます（笑）。泳ぐのには気力、体力が伴わないといけません。シュノーケルで海に飛び込んで熱帯魚のレポートをしたり、スキューバの免許も取って海に飛び込んだりもするのですけれども、やはり海は心身ともに健康な方が行かれて楽しいところなのだということを発見しました。森は、弱ったときでも息吹をもらえるのだなということを発見できたロケでした。だから、私は迷わず森派です。

（阿部） なるほど、個人的には恋愛関係など、そういったことを聞きたいのですが。

（遙） これをしゃべったら2時間かかります（笑）。

（阿部） そうしたら、後の方でまた別の機会にということ。

（遙） ぜひ。

（阿部） 確かに、そうですね。海に行くときはやはり健康でないという感じはしませんね。

（遙） 海と触れ合う、森と触れ合うということを考えますと、やはり森の方が優しいですね。

（阿部） どこなのでしょうね、その森の優しさというのは。

（遙） たたずんでも楽しめるのです。海は風もあります。波もあります。触れ合おうと思えば飛び込まなければいけませんね。

（阿部） もう結論みたいなことが出てしまったのですが、そうしたら、もう少し森への行き方というか、とはいえ今、都会に住んでいて、ロケという機会もなくなつたとおっし

やられたのですが、ご自身で最近どういう形で森に行かれているのか。まずそこをお聞きしたいのですが。

(遙) やはりきっかけはロケでしかないのですね。森に行こうと思うと、森の良さにちょっとでも触れるからこそ行ってみたいと思うわけです。触れる機会がなければ、行こうとも思わないわけなのです。触れる機会が私の場合は多かったのです。

ロケバスに乗って移動していて、「この川はきれいですね。この山はきれいですね」と言うと、スタッフの一人から「この奥には大台ヶ原というのがあって、日本の中の熱帯雨林で、365日のうち300日ぐらい雨やねんで。ここで驚いていたらあかんで。大台ヶ原に行ったらもっとすごいで」みたいなことを聞いたら、後日行ってみようと思って行ってみたりします。そういう小耳に挟むとか、うわさに高いというので触れる機会があって深い森に入ってみようと思って、そうやって癒されて以来、私はゆっくり時間が取れると森に行くのが趣味になりました。

(阿部) 最近はどこに行かれましたか。森、山、一番最近に行かれたのはどこですかね。

(遙) 来週も行くのですが、信貴山ですね。連休や日曜、祝日は神戸と京都は避けて生駒に行けというのが私の信念です。神戸も混み合います。ハーブ園など神戸もいろいろと行きましたが、やはり休みの日は混み合うのです。京都の山も鞍馬、貴船も行きましたが、結構混み合うのです。生駒山、信貴山辺りですと、これが穴場で空いているのです。

(阿部) なるほど、パンフレットにお書きになった中でも、なかなか自分の求める森に出会えないと。

(遙) 難しいです。

(阿部) 今おっしゃられた、やはりいいなと思うところは人が多い。ちょっと贅沢な悩みみたいな感じもするのですが、自分で独り占めしたいけれども、そう思うような森林、森はやはりほかの人もよく来る。そして、お勧めが生駒、信貴山ということです。

(遙) そうです。

(阿部) 信貴山も人が多いのではないですか。

(遙) それは京都、神戸に比べると、まだ。

(阿部) 行って、その信貴山で何をされているのですか。癒されると言っても。

(遙) まず運動靴に履き替えます。

(阿部) それは大事ですね (笑)。

(遙) そして仲間と連れ立って、「だまされたと思って私に付いて来てごらん」と言って、山の中に入っていきます。あの辺は要所、要所に神社などがありますので、一応お参りをします。散策しながら、帰りに温泉に入ります。予約しておいたお茶屋に入って、今でしたら紅葉弁当を食べます。それからドライブがてら山を下りつつ、ポイント、ポイントで車を止めては山の景色を眺めます。そうやって1日過ごします。

(阿部) 「五感で感じるのが大切だ」ということもお書きになっていますけれども。

(遙) そうですね。私は屋久島に行ったときに、期待がすごく高かったものですから、ちょっとショックも大きかったのです。私は屋久島に一人で行ったのです。浸りたかったわけですね。屋久島に行く前に大台ヶ原の失望というものがありまして、大台ヶ原に最初に行ったときに「ここが熱帯雨林か」と感動しました。これか、世界がまるで違う、霧がかかっている、全身が雨でもないのにぬれていく、何なのだ、この世界はとって、翌年に私の友達でタレントと芸人さんをやっているシルクさんという女性に「だまされたと思って大台ヶ原に一緒に行こう」と言って行きました。

日帰りできない距離ですので、1泊しましたが、泊まる宿探しから苦労しました。まず、いい宿がなかなか見つけれなかったのです。秘湯とか秘境という宿になると、風呂に入ったらクモの巣が張っていて、大きいクモがいました。叫んで風呂から飛び出て、ご飯に

は冷凍したシカ肉のスライスが出てきました。このシカの肉があまりおいしいと私は思えなかったのが残念でした。そして翌朝、「これをおにぎりにして山に入ろうね。本当の山だから、茶屋はないはずだからおにぎりにしようね」と言ったら、おかみが飛び出してきて、「頼むから米を残してくれ。私たちの朝ご飯なのだ」と言われたときに悲しかったです(笑)。そんなにお金が落ちていない自然に満たされた土地なのだ、もっともっと開発されるに足る山なのにと、ちょっとわびしい思いをしながら山に入っていましたら、シカに食べ荒らされて、私が前に見た大台ヶ原とはもう全く違う光景になっていて、葉っぱがあまりなかったのですね。

あのときの興奮を2度体験できませんでしたので、「じゃあ次は屋久島だ」と思って屋久島に一人旅に行きました。観光ガイドさんが付いてくださって、入っていったのですが、大変混んでいました。列を作って山に登ります。ポイント、ポイントでガイドさんがいろいろ教えてくださるので、場所の取り合いです。これは観光ポイントをガイドさんと回るからなのだと思います。これは観光ポイントから外れたところに行きたいと言ったら、「女性が一人で屋久島の秘境に入るのはやめてください、よく死にますから」と言われました(笑)。「私は死にません」と言いながら山に入ってしまったところ、やはり団体さんが大勢来られていて、お騒ぎになられていて、全くくつろげなかったのですね。

そうなりますと、お金が落ちる場所なら落ちる場所でこんなに混み合うか、落ちない場所なら落ちない場所でこんなにわびしい思いをしなければいけないのかというのが私の山体験です。

(阿部) なるほど。観光化されすぎても困るし、同時にやはり、ある意味で気楽にというよりも、安心して行けるような場であってほしいと。

(遙) そうですね、安心が大事だと思います。両方ともある程度観光化されているので、安心は安心だったのですが、人込みの山を避けて一度奈良の山奥に行ってみました。そうすると、全く観光地化されていません。ガイドブックを見たら遊歩道があるということだったので入っていったのですが、人っこの人と出会わなかったです。もちろん茶屋もありません。水筒と弁当だけ持って山に入ったのですが、先ほどの映像であったように、木が倒れ、枯れ葉がいろいろと重なり、荒れ果てた山でした。遊歩道は、あったのだろうなという程度の遊歩道です。

そういうところを歩いていると、やはり暗いんですね。暗いところにひもがぶら下がっていると、ここで誰か何かしたのだろうか。また、ひもがぶら下がっているのです。そして歩いていきますと、休憩する場所すらありません。腰かけるにふさわしい木や石にすら出会えなかったのです。疲弊しながら「どこが遊歩道やねん」と思いながら山登りをしていました。そうしますと、あるときに一緒に歩いていた知人が見つけたのです。「この木はなぜ削れているの」と。随所に削れているところがあるのです。「ここはクマが出るんちゃうか」。この一言で恐怖心に火が着いて、クマに襲われてはいけないと脱兎のごとく山を下りたのです。そのときに思いました。「普通の山はないの？」(笑)。

山は好きなのです。こんなに山に行っているのです。一人ででも行っているのです。別に今回このシンポジウムに招いていただいたので無理やり山の話に近づけているのではないのです。よく私を名指ししていただいたと思うぐらい、私は山が好きなのです。その私がゆっくり楽しめる山となかなか出会えないのを、今日は先生方に何とかしていただきたいと思って来ました(笑)。

(阿部) 早速宿題が出ております。私の同僚の湯本さんが屋久島に詳しいので、その辺の観光と森林保全、普通の森をどうやって作るかということ、それからやはり末松さんにもこれは答えてもらわなければいけないでしょうね。何とかしてくれということなので、林野庁の責任においてお答えをしていただくということです。

(遙) 繰り返しますが、海では泳がないと死んでしまうのですよ。でも、森はじっとしていても息吹が自分の中によみがえるのを自分で体感したわけです。私は、人間の直感をもっと信じてもいいのではないのかなと思うのです。先ほど末松さんのお話で、木に囲まれていたら子どもはキレないとありました。それはなかなかデータや根拠を出しにくいと思うのですけれども、私は人の直感というものはもっと信じてもいいと思います。というのは、自分がそう直感したからなのです。森にいると息吹をもらえたのです。木々には個性的な香りがあるのだという畑さんのお話も先ほどいただいて、やっぱりなと思ったのですが、におい、湿気、適宜な木漏れ日、風、360度の緑、そして土のにおいみたいなものに囲まれたときに感じた私の直感、今でも間違っていないと思います。あそこは命が宿る場所ですね。

(阿部) お書きになったもので「五感で感じる事が大切だ」ということです。せっかく畑さんがいらっしゃるので、遙さん自身は森の香りというものを一体どんなふうイメージされていますか。あるいは、これは畑さんに直接聞いて、森の香のお香というのは松栄堂にあるのでしょうか。なければ作ってもらった方がいいのかもしれませんが、どうですか。森の香りとは何でしょうね。一つではないのかもしれないのですが。

(遙) はい、土の香りも混ざりますね。

(阿部) 土のおいも季節によっても違うのかもしれないし。

(遙) 枯れ葉の香りも混ざるのでしょうし。

(阿部) やはり行ってみなければ分からないという。

(遙) ただ、今日は森をどう消費していくのかという観点が各先生方からもあったかと思うのですが、「森の香り」という商品で売られている、商品名を出してあれですけどもバスクリンだったり、アロマだったり、いろいろな「森の香り」というニーズがあるのは市場は分かっているわけです。でも、どの香りを買っても、私にとってみたら森の香りではないのです。私たち消費者はちゃんとした森の香りに出会えているのかといったら、決してそれは市場には出ていません。

それから、木自体、木の商品についても、日本の適宜な木の消費が必要だというお話も先ほどありましたけれども、「じゃあ」と思って私は木の家具を買いました。木目調入りの木の家具で、高かったのです。買まして、椅子に比べるとちょっと木の脚が長かったのですから、家具屋さんをお招きして、「脚を切ってください」と言いました。「遙さん、これは太い木の脚だから、お宅では切れないので、工場に持って行って切ります」と言っ、工場に持っていかれたらすぐ戻ってこられて、「遙さん、すぐ切れました。これは段ボールでした」と言われました(笑)。

私は木だと思って買ったのです。木目まであったから。でも、段ボールを圧縮したものが最近はお出回っているのです。これも遠回しに言うと木の消費になるのかもしれないので難しいところなのでしょうが、日本の木は高いのです。飛騨高山の木みたいなものを売っ

ていて、それでできた家具だとか言っています。行きました。家具を求めて東京、大阪を転々としてきました。これが高い（笑）。外国でできた大量生産の家具の方が、段ボールではないけれども比べものにならないくらい安いというところで、私たちは本物に値段的に近づけなかったり、あるいは森林の恵みに近づけるものがあつたとする全く違うものだったり、実は消費するにも、何も近づけてさえいないのではないかというのが、木の愛好家としての私の感じるところです。

（阿部） これは本当に大事な指摘だと思いますね。末松さんも強調されていましたが、そして畑さんもそうですが、使いながら守っていくという視点がものすごく大事です。その使う側、消費者としてのわれわれの態度というか、意識のあり方がすごく大事なのだと思います。

畑さんには本当の森の香りに出会っていないという遙さんのために特別なものを作ってもらおうということをお約束していただいて（笑）。なかなかそれは難しいかもしれませんが、森に行きたくなるような香りみたいなものもあるかもしれないですね。それ自体が森の香りというのはなかなか難しいかもしれないけれど、使いながら育てるということは本当に大事なことだと思うのです。恐らくこれも末松さんなり、湯本さんも生態系サービスの話がされましたので、その辺で少し後でパネルディスカッションのときに話をさせていただければと思います。

どうでしょうか。今日は熱帯林の話もいろいろ出たのですが、遙さんご自身は熱帯林に行かれたことはあるのでしょうか。

（遙） 大台ヶ原は熱帯林と言っていいのですか。

（阿部） あれは多雨林ですが、この辺は専門家の湯本さんにきちんと熱帯多雨林は何ぞやという話もしてもらってもいいのですけれども、やはり熱帯ではないでしょうね。

（遙） そうですか。

（阿部） 南の方でロケは。

(遙) マレーシアの。

(阿部) マレーシアですか。

(遙) ホタルを見に、山と川の中に入っていました。

(阿部) ああ、分かりました。ホタルの木というやつですね。ちょっとお話をお伺いできればと思います。

(遙) マレーシアの商社に駐在しているお友達がいる、「すごい世界を見せてあげる」と言うので連れて行ってもらいました。この森の中で日本軍もいっぱい死んでいるということ聞きながら、「こんなところでホタルを見ながら、みんな戦っていた時代があるんやな」と思いながら、それはそれはいろいろな思いがよぎった体験でした。

(阿部) 熱帯林のホタルだけ見に行ったのですか。

(遙) 中もいろいろと探索させてもらいました。でも、夜に行きましたので、昼間はどんなのかは・・・。

(阿部) そうですね。僕たちは夜はあまり熱帯雨林をうろちよろしないということにしているのです。そういった意味ではやはり怖いですね。

(遙) はい、やはり怖かったです。ただ、森の中に入ったスリリングなワクワク感を大台ヶ原で初めて体験してからというもの、「インドネシアの方にぜひ行ってみてください」と言われて行かれた畑さんのご経験で、実際に行ってみて熱帯雨林はどうだったかというような話をぜひ今日は聞かせていただけたらと思っています。大台ヶ原を極めたら何が待っているのだろうか。本当に世界が違うのです。森に行くと全く異次元の世界だなと感じましたので、その究極にはどんな世界があるのだろうかということを逆に私が今日聞きたいなと思いました。

(阿部) 畑さん、よろしくお願いします。熱帯林に行かれてどんなことを感じられたのか。社員の方もいろいろ行かれていると思いますけれども、畑さんご自身のご意見、ご感想をお聞かせ願えればと思います。

あと、いろいろお聞きしたいのですが、市場の大切さということも最後に書かれています。先ほど少しおっしゃられましたが、もう少し詳しくお聞かせいただけますか。

(遙) 私自身は家具、インテリアも結構好きで、木のインテリアがいいなと思っているのですが、実際には先ほど申し上げたようにほんまものは高くてなかなか手が出ないので。テーブルなどでも、手が出るものといったら、ステンレスでできたものやガラス張りだったりするわけです。そうすると、危険なのです。暗闇で歩いていて膝をぶつけてけがをするのは、木ではなく、ステンレスの家具だったりするわけですね。角があるのですよ。尖っているのです。だから、どれほど寝ぼけて歩いていても、どれほど部屋が薄暗くて歩いていてもけがをしない家具を求めているのですが、やはりそれは木だと思うわけです。でも、どのお宅に行っても、ほんまものの木の家具をそろえておられる方は少ないです。私が室内で求めているのはけがをしない家具なのですが、それですらままならないのです。

また、私も日本各地に行かせていただいて、山の奥の方に行かせていただいたときに、廊下も壁もすべてが木でできた小学校の校舎の公民館で講演したことがあるのです。もし私が子どもを生むことがあればこの小学校で育てたいと願わずにはおられないような空気がありました。今日のお話でインフルエンザが少ないというのも、そこを知っていますので、私はものすごく説得力がある話として聞けるのです。

では、これほど人に優しいものが、なぜこんなに山奥に行かないと手に入らない、出会うことすらできない、購入もできないのだろうかと思いました。もっともっとその良さを知って初めて買えるのであって、その一つ手前に森の良さを知って初めて行ってみようと思えるのです。森林年であるということと今日伺いましたけれども、そういう大きいイベントの年であるということと同時に、森の良さというものがどれほど消費者の皆さんに届いているのだろうか、届けてほしいなと思います。だって、私ですら手に入っていないわけですから。

(阿部) 本当に大事なことをご指摘いただきました。家具だけではなくて、建造物もそうですね。末松さんがインフルエンザの話をして、木造の校舎だったらということで、

思わず本当かなと思ったけれど、確かにそうだなという実感ではそのように思いますよね。

(遙) 写真を見ていてもなかなかご実感されにくいかもしれませんが、行ってみたら分かるのです。

(阿部) 実はわれわれ地球研(総合地球環境学研究所)は、4年前でしたか、新しい建物がすぐこの近くに建ったのですが、木造なのです。やはりいいですよ。

(遙) よろしいでしょう。

(阿部) 風邪を引かないし、頭も良くなるということなのですが、それもそうです。頭が良くなったような気がしますし、やはり木のぬくもりというのはいいです。

(遙) よろしいでしょう。

(阿部) ぜひ来ていただければと思いますが、気遣いという言葉をも末松さんがさりげなく使っていたのですが、使うというのは全く大事なことです。それによって、まず森林と一歩近づけるかなという感じがします。

(遙) 木も大事ですし、緑もすごく大事だと思うのですね。なぜおっちゃんたちが毎週ゴルフに行くのかという話です。ゴルフがお好きであるということもあると思うのですが、やはり自然の中にいる自分というものも必ず楽しんでおいでなのだろうと思うのですね。

(阿部) 確かにそうですよね。なぜあんなに面白いのだろうと思いますが、やはり緑の中でやるというのがあります。あれは周りに緑がなかったらゴルフもあまり行かないのかもしれないですね。

(遙) そうなのです。生涯、都心の打ちっ放しだけに行っておいたらいい話なのです。

(阿部) そうですよね。

(遙) でも、どうしてわざわざあんなに早くから車を飛ばして山の奥に入っていくのかといったら、私たちの生物として深いところで森を求めているのだということの自覚があるのだと思います。私はたまたまそれを 20 代のときに体験したので値打ちを感じる機会があったのですが、一般の方はどれほどおありかなと思います。

(阿部) 本当に大事なことです。

ぱっと見たらあっという間に 30 分たってしまったようなのですが、本当ですかね。まだまだ実はお聞きしたくて、特に最後の方で「森林の恩恵のおすそわけ」という言い方をされていて、これはわれわれ研究者の方だと生態系サービスという非常に堅苦しい言葉になってしまうのです。本来なら森の恵とか、そういったものでわれわれは理解していたのを、どうしても堅苦しい言葉にしてしまう。その辺も実は距離を遠くしているのかなと思ながら遙さんの話を聞いていました。

あと 18 秒しかありませんけれども、また後でご登壇いただくのですが、最後に、特にお三方の話を聞いて、今こういったことを思っているのだということがございましたら一言お願いできますか。

(遙) 先生方には、後で討論の席に座らせていただきますので直接ぶつけてみたいと思うのですが、例えば屋久島などは 100 人に 1 人の割合でガイドさんがいます。そこで生活が根ざしている方々がいらっしゃる、森と生きていらっしゃる方々がいらっしゃるというのは大変肯定的な側面だと思うのですが、100 人に 1 人ガイドさんがいられるぐらい客が多いということです。ということは、混雑しているということにもつながりますので、この利害の調節です。先生方のコメントの中で、誰のための森なのかとなったときに、そこで生きる人たちのための森であることも大事なのですが、ぜひ消費する側の森としてもバランスを取っていただけたらなと思います。この後で個々にお話しさせていただきたいポイントを私はメモしながら聞かせていただきました。順番に問わせていただきたいと思いますので、乞うご期待（笑）。

(阿部) お覚悟の方をよろしく申し上げます。

そうしたら、いったん遙さんにお下がりいただいて準備をします。その後、パネルディ

スカッションを始めたいと思います。どうもありがとうございました。

(遙) ありがとうございました。

(石上) 遙さん、阿部さん、どうもありがとうございました。今お話をいろいろ伺って私も感想がありまして、一言と思います。

畑さんにお香の話を伺いました。お香というのは茶道と大変関係がございますが、茶道という器がありますね。例えば志野、瀬戸物などがありますけれども、森林地帯と非常にいい粘土ができるところの境目に焼き物の大生産地がつくられるのです。最初に湯本さんのお話で、屋久島の世界遺産のことがありましたが、今、奄美諸島が琉球と一緒に世界自然遺産をねらって頑張っているのです。徳之島というところに11世紀から14世紀にカムイヤキという瓶を焼いたところがあります。それはやはり亜熱帯の雨林と非常に良質な粘土ができるところの境目に焼き物の窯業地帯ができるのです。森林というのは日本の文化である茶道と非常に密接に結びついて発展してきますけれども、そういう日本の焼き物の器は森林があつてのことかもしれません。そのようなことを思いました。

もう一つ器で、焼き物というと盃を思い出します。ドイツに木材生産が多くて消費が多いのは、ドイチェスハウス等もありますが、やはりビア樽やワインの樽などの木材の需要があるかなと思います。そうすると、日本も日本酒の醸造に樽があるのでおいしい酒ができるのではないかと思います。

いろいろ思いつくことはあります。遙さんが信貴山にウォーキングに行かれたということでしたが、私はちょうど1年前に信貴山の朝護孫子寺で絵巻物が展示されるということがあったので、行って高安城を歩こうと思ったのですが、一人で怖くて戻ってきてしまいました。今度はちゃんと勇気を出して運動靴を履いて行ってみようと思います。

パネルディスカッション

パネリスト：

湯本 貴和（総合地球環境学研究所 教授）

畑 正高（株式会社松栄堂 代表取締役社長）

末松 広行（林野庁 林政部長）

遙 洋子（タレント・作家）

コーディネーター：

阿部 健一（総合地球環境学研究所 教授）

（阿部） ただ今からパネルディスカッションを始めたいと思います。あらためてですが、地球研の方では通常、先生もみんな「さん」付けでお呼びしています。今回もそのようにいたしたいと思います。

びっくりしたのですが、質問票の回収率が高いといますか、皆さんがお書きになったものがこんなにたくさんあります。時間の中で紹介できるかちょっとおぼつかないのですが、できるだけ皆さまのご質問に答えられるようにしたいと思います。

それでは、既に宿題はたっぷりもらっていますので、湯本さんの方からいきましょうか。まず、どこからいきましょうか。屋久島の話から。

（湯本） 屋久島からいきましょうね。屋久島には、私は23年ぐらい前に博士課程のときに3年間住んでいました。うちの長男、長女は屋久島生まれです。そのころはずっと私は現在の世界遺産に相当する森林で研究していたのですが、何日通っても誰にも会わなかったというのが二十数年前の屋久島です。

一方で、林野庁との戦いがありました。屋久島に関する施業計画で、重要な原生林を伐採してしまう計画になっていて、それに対して屋久島の人たちのなかには、強く反対するグループがありました。私はそのときに、森林で木を伐らずに生きていくにはどうやったらいいのか、屋久島のように農地が乏しいところでどうやって生業をつくっていったらいいのだろうかということを島の人たちと一緒に考えていました。そのときにエコツーリズムを屋久島で推進するようなガイドブックを書いたりもしました。ですから屋久島に関しては、現在たくさんの方が入ってきていることの数パーセントは私に責任があると思って

いるのです。今の屋久島は、行く季節と場所によっては大変不快な目に遭うところになっているのです。間違いなく屋久島はそういうところになってしまっています。ただ、行く時期と場所を選べば、まだまだいいところはあるのではなかろうかと私は思っているのです。

おっしゃるとおり、お金を生むところは人が混んだりして、ある種の不快感があるし、行かないところは行かないところで「なぜこんなの？」みたいなどころがありますよね。日本のいわゆるツーリズムはみんな一般にそうなのです。都会の人が見るのもすごく大事だけれども、地元の人がどのような良さを伝えられるのかというようなことをもうちょっとちゃんと考えて、使い捨てにされない、ないしはそういう不快感を与えないようなツアーとは何かということをもう一遍考えた方がいいのではないかということをも今、屋久島でも言っています。

例えば縄文杉の人数制限です。6月の議会で町がそれを出したら、面白いことに町会議員全員否決となって、人数制限が行われないことになりました。130人のガイドがいて、旅館業はもっと多いわけです。そういう方々からすると、人数制限をすると自分の懐に直接響くわけで、反対に回ったというのが事実でしょう。11月の議会でもう一遍議決をやるのですが、屋久島の人は何も考えていないわけではないのです。ただ、いろいろな変化する状況になかなか追いついていないというのが実情だと思います、というのが取りあえずのお答えです。

(阿部) どうですか、遙さん。

(遙) 質問してよろしいですか。

(阿部) どんどんやってください。

(遙) 今の混み具合で十分な利益を生んでいるのですか。まだ足りないのでしょうか。

(湯本) 屋久島は今、若い人が増えている島なのです。私も関西の人間なので、よく「食えなくなったらお好み焼き屋をやったらええやん。鉄板1個でいけるやん」と言われましたが、ガイドは鉄板も要りません。靴とレインウェアがあれば明日からガイドができます

から、何の初期投資も要らないのです。だから若い人が非常に増えていて、それは非常にいいことだとは思っています。ただ、ガイドの質など、いろいろ問題もあります。屋久島に来てガイドをしたい、そういう職業の自由まで奪うのかみたいなことまで含めると、話はかなりややこしいと思います。

(遙) 観光客の方々の今後の楽しみとして、屋久島がこちらの方向性でもっと発展していきたいみたいなものはおありなのでしょうか。

(湯本) 今、森、とくに縄文杉ルートにばかり、観光入り込みによる環境負荷がかかっています。それこそ先ほどの話ではないですが、屋久島は海がきれいなので、海のツアーをもうちょっと売り出そうとか、カヌーの川下りをもっと宣伝しようとか、屋久島のまだ知られていない、多面的な価値にお客さんに気づいていただいて、ご案内するような試みをもっとしようというようにはなってきています。

(遙) 私は屋久島のことを結構厳しい言い方をしすぎたと思って今、胸を痛めております。そこで生まれて育てられた方がいらっしゃったとは思っています。

私が一つ救いになった屋久島のことは、ガイドさんでした。どこに行っても人込みでしたので、ガイドさんが「ここで生まれ育った僕だけが知っている穴場に連れて行ってあげる」と言って連れて行ってくださったところへ木々をかきわけて行きますと、海の方にぽこんと1個飛び出た大きな石があって、すごく危ないのですが、「この石の先に座ってごらん、そうしたら海が一面に見えるから」と教えてくださいました。今のお話で、ガイドさんの穴場めぐりというのもすごく可能性を秘めているなということ、一極集中しないために、いろいろと観光資源も大事でしょうから、もっと拡散して行ってほしいなということを思いました。

あと一つは、ガイドさんが「サルを見せてあげる。野生のサルが見えるよ」と言って見せてくれました。でも、私は関西出身ですので、箕面でさんざん見ているのですね(笑)。そんなことも笑い話として、ガイドさんの力量がすごく今後大きいと思いました。

(阿部) 遙さん、司会を替わってもらえませんか。何かその方がやりやすいような気がするのですが(笑)。

末松さん、どうでしょうか。林野庁として、あまり観光には直接かかわっていないのかもしれませんが。

(末松) 山を歩くことの効果という、先ほどの話について申し上げますと、木造の校舎もいいのですが、森林浴、森林セラピーなどもあります。あれも2時間山の中を歩くと、その後1週間とか2週間、いわゆるナチュラルキラー細胞が2割増えて、それが持続するので、がんなどにかかりづらくなります。それも分かっている効果で、そういうものをみんな始めようとしているのです。

多分屋久島の自然などもすごくいいと思います。この近辺でもありますが、そういう活動をしようとしている方々は各地にたくさんいらっしゃって、そういうところに多くの人が行くようになればいいと思うのです。しかし結局、現状は、そういうところへ行こうと思っても、まず行っても駐車場はないし、トイレはないし、そば屋もない。森に遊歩道だけはあっても、そこもずっと使っていなければ荒れてしまうし、案内する人もいないということがあります。そういうところを一個一個増やしていく。そういうことができるのではないかと思うのは、うまくやっているところがあるからです。ガイドさんが森林セラピーとして5人ぐらいの方を半日ぐるっと案内する、時間がない方は2時間案内する、できれば駐車場があつてというものです。最新の森林セラピーでは最初に血圧を測って、ぐるっと回ってきて、「良くなっているでしょう」ということが見せられるのです。それはいいことだと思います。

森の価値を示すというときに、やはり日本人は、屋久島だと考えるとみんな屋久島で森の価値を得ようとするのですが、実際は屋久島だけでなく日本中にいいところがあります。屋久島には行っていただいていいと思うのですが、何べんも行く必要はなくて、普段はこのところで癒されて、今度は長野のこういう山で癒されるとか、そういうものが増えていくことが日本でこれからすごく大切なのではないかと思います。

森林セラピーなどでお金を落としてもらうようにするためにかかる経費は、先ほど言ったような間伐して光が通るようにして、今度は人が歩くための道になりますが、そういう取組は山を守ることとセットになるような気がします。屋久島一極集中ではなく、日本中にそういうものができてくるというのがいいと思います。今はそれをやろうとしても、ビジネスの意識が全くなさすぎて失敗する場合も多いので、その辺は屋久島の成功の事例などをうまくまねをしてやっていくというしたたかなところも必要だと思いますが、日本中

でそういう可能性があるのではないかと思います。

(阿部) ありがとうございます。屋久島一極集中ではなくというお話です。実際、日本には素晴らしい森林があちこちにありますね。日本の国土は北から南に細長くて、いろいろなタイプの森林があります。例えば白神山地などはやはり世界遺産になっています。そういったところも考えながら観光開発をやる。そして、観光客が多すぎるということは難しい問題だと思いますが、訪れる人たちが落としていくお金が地元の人々の利益にならないといけない、その辺も少し考えなければいけないと思います。熱帯林の話でも出てくるとはと思いますが、取りあえずいったんこの話は切ります。

皆さんからいただいた質問で、まず、非常に素朴な疑問ですが、「山の香りというのがやはりするのではないか、この正体は一体何なのだ」ということで、やはり香りのご専門の畑さんにきちんと聞いておきたいとのこと。なかなか難しい質問だと思いますけれども。

(畑) そうですね。それを商品化して出してくれとか、先ほども先生が冗談半分におっしゃっていましたが、ほとんど不可能だと思うのです。フィトンチッドという言葉をご存じの方もたくさんいらっしゃると思います。15年ぐらい前でしょうか、森林浴という言葉がちょっとはやりかけたことがありました。森林浴は、フィトンチッドという特に針葉樹林から発されることが多いと思うのですが、そういう成分が人間の生理学的な部分に働きかける力があるのだというのが確かロシアの研究者の学説だったと思うのですが、そういうことだと思います。例えば日本のものでしたら、ヒバの木の油、青森などはヒバが非常に有名です。それからヒノキ、あるいはスギ、シダなど、針葉樹林の樹液を香料として使うことがすごく多いのです。

イメージフレグランスコンテストというものがあまして、今年は伊勢がテーマなのです。伊勢市、伊勢神宮です。なんと出てきた香りの7割ぐらいに針葉樹林の香りが香料として使われているのです。結果的に勝ち残っていくのはそれ以外のものが残っていったりしたのですが、日本人にとってそういう森の香りはフィトンチッドといわれる森林浴という言葉で語られる部分だということで、具体的にこんな香りというよりも、そういう素材に触れることが多分大事なのだろうと思います。

(阿部) それから、遙さんからあった「熱帯林のここがいいのだ、こういったことを感じたのだ」ということを、ぜひお話しいただけますか。

(畑) 私の体験ですか。実はここで話をするのは非常に恥ずかしいのです。先ほどの写真は私が撮ってきた写真なのですが、こんな空の日差しが差し込んでいる熱帯多雨林の写真をお見せしたので、それこそ横にいらっしゃる先生は「何という明るい日当たりのいい場所の写真だ」と思われるかもしれませんが、熱帯雨林というのは本当はそんなさっぱりした場所ではなくて、鬱蒼と先ほどおっしゃったような、限りなく湿度 100%に近いようなところですよ。先生はずっと木の上の方で生活しておられたみたいですから (笑)。

(湯本) 生活はしていません (笑)。

(畑) 木の上は鳥とか鳥獣の世界だったみたいですが、私は地べたの世界ですから、本当に恐ろしいようなところでした。一番忘れもしないのは、やはり夜です。寝たのか寝ていないのか自分で分からないのです。あらゆる音のサラウンドの中に包まれているのですね。実際には寝ていると思うのですよ。寝ていると思うのだけれども、水の音とか、雨も降ったのですが、雨の音とか、鳥とか、獣の声とか、何かすごいものをずっと聞いていたような気もするのです。そのように大自然に抱かれていたというのが私の体験です。

実は私が、連れて行ってもらったところと言うべきでしょうが、それは言うも恥ずかしいグヌン・ムル国立公園というところですよ。横で先生が「何や、あんなリゾートに行ってきたんか」みたいにおっしゃっていると思うのです。今の屋久島にも素晴らしいリゾートホテルがあります。そこへ行けば「どこかで見たな。昔ディズニーの世界で見たよ、この世界」と思うほどの素晴らしい熱帯が簡単に見られるのですね。トレッキングの道などもきちんと整備されています。そこから一歩キャンプに入るのは、それこそあなたの責任できちんと帰ってきなさいということで、そのめりはりが非常にはっきりしていました。リゾートの作り方ももっともっと世界に学ぶべきだといつも思うのですが、だまされたと思って行ってください、グヌン・ムル国立公園。

(遙) それを言われたら、もういてもたってもいられなくなります。

(畑) 先ほどあれほど言うておられたから。本当に素晴らしいところですよ。

(遙) 熱帯雨林のほんまものの中にいると、そこで感じられたのは、癒しですか、興奮ですか。

(畑) それは癒しですね。とにかく癒しというよりも、ここでこうやってネクタイを締めてやっていることなんて何なのかみたいな世界ですね。

(遙) どんなにおいですか。

(畑) それが、すごいショックだったのです。キャンプするのに、はっきり言って私は自分の体を運ぶので精いっぱい、私の食べる物や水や着替えなど全部、地元の人がかついで運んでくれるのですね。もう眼鏡など常に湿度 100%で汗と水分で曇っている状態ですから、ふっと気が付くと前の人の中におぼんと当たりそうになるのです。なぜ彼が止まったかという、ここをノブタが走ったと言うのです。「泥の中を足跡がこっちからこっちに行っている」「本当、本当」と言って、彼らはおいでで止まっているのです。

(遙) ノブタのおいですか。

(畑) 獣のおいでです。でも、それを言われても、私はそのにおいが分からないのです。日本でも指折りのにおいのプロだと自分は自負していたのですが。なんと僕の嗅覚はというと、完全に退化していて、そんな偉そうに「熱帯雨林のにおいはこういうものでした」と語られるようなものではないのです。

もう一つびっくりしたのは、一人の現地の人足の指は一本一本ぐっぐつと指が動いていたのです。トレッキングシューズの中に収め込んでいる私の足は人間の足ではなくて、指が一本ずつぐつと開く彼の足が人間の本来の指なのだ、足なのだみたいなことを思って、それはいろいろな意味で非常にショックでした。ぜひ行ってください。だまされたと思って行ってください (笑)。

(阿部) シルクさんをだましたのですから、今度はだまされて (笑)。

湯本さん、どこがいいでしょうね。熱帯雨林はどこに行けばいいのかというのは、いかがですか。

(湯本) 私は20代のときにコンゴのゴリラ、チンパンジーのいる森に10カ月ぐらい連続でキャンプ暮らしをしていて、その後、アマゾン上流のコロンビアで5カ月ぐらい、それも半分テントみたいなところでずっと暮らして、それからマレーシアのサラワクの森で暮らしていました。そのときは、私は仕事が夜だったのです。温帯だと花は昼に咲くのが普通でしょう。夜に咲く花はあまりないのですけれども、熱帯雨林だと半分以上の花が夜に咲くのです。だから、もっぱら夜に歩いていました。やはり夜に咲く花はにおいで動物を呼びますから、すごくいろいろなにおいがします。それはすごいです。

それから、ファイアーアント（火のアリ）が、歩いていると襲ってくるのですね。

(遙) 大きいアリですか。

(湯本) 小さいです。小さいけれど、刺すのです。むちゃくちゃ痛いですよ。アフリカでもサスライアリという噛むアリがいて、このアリは夜に活動するので、夜に歩くと結構ひどい目に遭いますね。

(遙) そこまでプロ級の旅は求めていないのですね（笑）。そこまでワイルドな体験をしたいとは思っていないのです。初級編として体験できるような熱帯雨林です。

(畑) それはまさに私の世界ですね。だまされたと思って、グヌン・ムル国立公園リゾートに。

(湯本) そのグヌン・ムルはいいですね。

(阿部) ということで、皆さん、だまされていたければと思いますが、どうですか。先ほどにおいのプロの畑さんが音の話をされたのを、僕はなるほどなと思ってお聞きしていたのです。確かに森林の音というのも、中に入って、それこそ観光客がいっぱいいるところではなかなか聞こえないのだけれど、一人になったときにいろいろな音が聞こえてく

る。熱帯林でもそうですよね。

(遙) 人が混み合いますと、森林の音が聞こえないのです。人の話し声や笑い声しか聞こえないのです。あと、皆さん観光で来られているので、テンションが高いのです。一人で癒しに行っているのは私ぐらいだと思います。皆さん基本は観光ですので、お酒も入っていますし、盛り上がっておいでなのですね。ですから、まず耳が遮断されるというのが私は残念でした。

冒頭で私は「山を独り占めする気か」と阿部さんにお叱りを受けましたが、独り占めをしようとは思っていません。適宜な空間さえ手に入ったらみんなで味わいたいなという思いはあるのですが、バーゲン会場かというぐらい混むのは何とかならないかな、と。そういう調整は、誰が責任者としてやってくれますの？

(阿部) それはやはり末松さんあたりが考えてくれるのではないのでしょうかね。どうでしょうか。

(末松) 屋久島のこれからをどうするかについての町役場の議論などをわれわれも聞いていますが、本当に難しいです。行政的に制限をしていいことは多分なかなかなくて、やはり希望というか、興味を分散させるのが本当に大切なのです。先ほどの繰り返しになりますが、いろいろなところにみんな散らばって各々いい体験をしてもらえれば一極集中しないのだと思うのですね。

日本人はそこがまだ上手ではなくて、フランスなどではバカンスで農村部に散るときは割といろいろなところに散るというのがあります。散って、いろいろな方が観光をすることによって農村の活力が上がるのです。これは非常に単純なのですが、屋久島で人口が増えたというのは、新たな産業としての観光で食べられるようになってきて人口が増えたのです。フランスなどで農村地域の人口が日本と違って増えているのは、いろいろなところに少しずつ散らばっているということがあるのだと思うのですね。だから、私たち行政がやらなければいけないのは、いろいろな地域の地域おこしです。そういうことをやって、「私は屋久島が好き」「私はどこが好き」というのがたくさん出てくるようになるのが一番大切なのかなと思います。

私も仕事柄行って見て、ここはいいなと思うところはいっぱいあるのですね。でも先ほ

ど言ったように、私は案内してもらっているからいいけれど、自分で今度来るのだったらトイレがなくて困るなどか、そういう問題があって、幾つかそういうものを直していくというのを地道にやっていくのが大切なのかなと思います。

(遙) 末松さんの先ほどのお話でぜひ伺いたいと思ったのですが、作業道だったら 10 分の 1 の価格で造れる、とおっしゃっていました。写真を拝見したら、作業道、よろしいではないですか。土の道で、別に舗装もされていない、あんな道が欲しいのです。実際に山に入ったら道を探すのから困難で、恐怖を感じて断念してしまうことが多いので、まず、なぜ作業道に反対される方がいるのかを伺いたいのですが。

(末松) そういうものを造っていこうという人たちも多いのです。ただ、やはり車が通れて、自分の家から親戚の誰々の家まで車で行けるようなものができたら便利だというのが多いのがこれまでだったと思います。そうではなくて、今議論しているように、そこを歩いて癒されるための道だと思える人が増えて、そういうものも必要だということになると、別に舗装である必要はないです。

(遙) 作業道がいいのです。

(末松) 遙さんの言うようなことの良さが共感として分かってくると、作業道の整備状況も良くなるのだと思います。ある程度の車の通る道はこの辺でもういいのではないかと、ということになりつつあるのだと思います。

(阿部) そうですね。われわれはどうしても「行政が、行政が」と言ってしまうがちなのですが、実はわれわれの意識の方を少しずつ変えていくということも本当に大切かと思っています。一極集中しないように、あるいは木の下で騒ぐのは花見のときに限るようなことも考えてもらって、静かに癒されたい、森の声、森の香りを聞くといったことも大切だという、われわれの意識の方もすごく大事かと思っています。

さて、いろいろ遙さんから質問をいただいたのですが、私は忘れてしまいました(笑)。ほかにもいろいろ末松さんの方や湯本さんの方に質問があったと思うのですが、湯本さん、どのような質問を受けたか覚えていますか。

(湯本) ちょうどいい山がないのだよという話が。

(阿部) 普通の山が欲しいのだと。

(湯本) ですよ。

(遙) たまたま今日は屋久島にばかりフォーカスが当たってしまって申し訳ないと思うのですが、私もそうですけれども、信貴山でしたら、ポイントも分かっているし、東京の方を案内できるぐらい詳しくなったのです。ガイドさんたちはこういうポイントづくり、こういうノウハウの蓄積みたいなご活動までなさっているのですか。

(湯本) 例えば沖縄北部のやんばるといふところがあります。そこも亜熱帯多雨林というか、雨が多いいところ。網の目のようになっている林道は自然を見に歩くのにちょうどいいのです。林道はあんなには要らないだろうとも言われていますが、そこは適度な広さがある、例えば鳥を見ながらガイドをする人が「あそこに鳥がいるからみんなで望遠鏡で見ようね」というのにも、ちょうど幅としてもいいのです。山道で狭いと難しいでしょう。それが結構広くて、すごくいいのです。先ほど言った発想の転換というか、そういうものはそういうふうに使えばいいし、使っているガイドも実際にいます。そんな自然の豊かさを知るような活動は各地にあるのだと思います。

(遙) 島を挙げて違う展開に向けて組織づくりをするというのは、まだこれからなのですね。

(湯本) そこはやはりぼちぼちですね。先ほど私が言ったのは、森の使い道には、各人いろいろな見方がありますよ、ということです。同じような思いを持っている人だけではないわけです。もうちょっと林道を広げて舗装を整備してやろうという人たちもいないわけではありません。むしろ多いかもしれません。そういう意味では、島社会といっても一枚岩というわけにはなかなかいかないのだと思うのです。ただ、そういう中でベターな方法は何かを考えている人は、私は非常に多いと思います。

(阿部) どうぞ、畑さん。

(畑) 私がちらっとプレゼンのときに話題にしたモデルフォレスト事業は、京都モデルフォレスト協会という団体まできちんとできていて、あれは確かカナダが運動の発祥です。日本の言葉で言うと地産地消という言葉になるのでしょうか。こういう都市部で普段生活していて、仕事もしている人間はもちろん森林の、森の恵みを享受しているわけですから、自分たちの時間や、少し汗を流すことも含めて森にかかわろうという運動がモデルフォレスト事業なのだと思います。それを企業単位、地域社会、NPO などさまざまな形でやっついこうということです。

ですから、有名な屋久島に行ってすごすぎに触れてみたいとか、そういうものとは全く違いますが、本当に森に踏み込んで、経験のある人のアドバイスを受けながらかかわっていくのです。一ぺんやったからどうのこうのではないけれども、何度も何度も重ねていくうちに自分自身のものの見方も変わるし、時間の使い方、また日常生活でいろいろなものを享受するときの姿勢が変わっていくと思うのです。

日本の京都は、カナダから起こったモデルフォレスト運動の先駆的な地域になっているのですね。そういうこともあって私たちもかかわっているわけです。遙さんのおっしゃるような「ちょうどいい」というのが、その辺に落ち着いてくれると一番いいのだろうなと思います。

(阿部) そうですね。

(畑) 信貴山から一歩出られて、屋久島まで飛ばずに、大台ヶ原まで行かなくてもみたいなところだと思うのですね。そういう運動が今、徐々に徐々に生まれつつあるように私は思うのです。

(阿部) 今まで人の集中している、関心の集中している森ばかりだったのですが、実は人が今まで無視して放っただけの森林がある。それを何とかしようというのがモデルフォレスト事業ということだろうと思います。

(畑) もしよかったですら遙さん、ただまされたと思って、うちの会社の活動に参加されると、シカ肉を美味しく食べられます (笑)。木を切って、間伐材でとにかく階段を作っただけみたいな話なのです。この間も「ようやく5段作ってきました」と報告してくれましたが、そういうことが要は先ほどの森林浴なのですね。多分そんなことだと思います。

(遙) それは今後の大きな可能性を秘めているご活動だと思います。私は5人の兄嫁がいるのです。兄も5人いるのですが、兄嫁たちはこぞって50代、60代になるのです。子育てが済んで何を始めるかといったら、歩くことです。その世代の方々にはハイキングは大変人気だそうで、やはり歩くところから火が着くみたいですね。「みんなでハイキングに行きましょうか」というところで山の事故も最近増えてきているのです。60になってからでも手遅れではないですけども、歩き初めと見初めと体験し初めが同時に来たら危ないです。やはり楽しみ初めから始めるためには、畑さんのおっしゃっているような事業で若いときから山の恵みに触れていくことが大事です。私も、好んで一人で屋久島に行ったわけではないのですよ。探しているのです。適宜な癒してくれる山はないかをずっとずっと探しているのです。長野県まで飛びました。扉温泉みたいなものもありました。あの辺りに行ったら、さすがに混んでいませんでした。すてきな植物園もあってよかったのですが、帰りに崖崩れがあって帰れなかったのです。だから、そんなリスクを背負う山の体験ではなくて、もっともっと身近にあるはずなのですね。それが見つからない。「この辺りに行ったら」というのを教えてほしいのです。

私は3番目の兄が旅行社をしているものですから、旅行社にも聞きました。「女が一人で旅して、適宜な湖畔をジョギングできて、森林浴できて、適宜なサイズの宿で、凍ったシカ肉ではなく、残さなければいけないご飯でもなく、普通に山の恵みを食べられるところはないのか」と聞いたら、「琵琶湖を走っておけ」と言われました (笑)。それで琵琶湖に走りに行きました。そうしたら、湖畔を走れるのはちょっと間だけで、すぐに車道に出なければいけません。排気ガスを吸いながら走らなければいけません。また、1周できるサイズではありません。

そうなりますと、適宜なものの情報がなかなか来ないのですね。ガイドブックを見ても、行ったら外れというのが決して低い確率ではなかったりするものですから、発信をどう考えていращやるのかも伺いたいです。そういうところがおありになるなら、なぜ発信しないのですか。誰に怒っているのかよく分からないのですが。

(阿部) いよいよけんかが始まったような感じですが、これはやはり末松さんにお伺いしたいと思います。

(遙) 探しても、探しても見つからないのです。

(阿部) そういうことらしいですよ。

(末松) 本当にそうですね。日本でそういうところはいっぱいあって、かつ最近思うのですが、今の兄嫁さんのお話だけではなくて、森林インストラクターの方など案内のできる人も増えていて、いい場所もあって、けれどもそれが多くの人の森林の体験につながらないというのが今の状況だと思います。

仕事で「ここがいいよ」と言われて連れて行かれると、本当にいいのです。あとは、いつも言っているのは「トイレがあるといいね」とか、「地元のペンションや旅館の人たちとこれが組織化できるといいね」ということです。そして行政的には、地域のリーダーの人たちがみんなで集まって、それを首都圏や近畿圏など都市の人たちにどうやって説明するのがいいのか議論する。そういう話がぐるぐるぐるぐる回っているのが現状で、そのつながり合わせをどうできるかが鍵だと思います。

それができていないから怒られる状況なのですが、できる可能性はたくさんあると思うのです。例えば信貴山だったらガイドできる人が一人ここにいらっしゃるわけです。そうしたら、10人ぐらいの人が森を歩いて幸せになる準備はできているのです。誰がその結びつけをできるかというのが鍵で、これがなかなか難しいですね。例えば市役所や区役所、あるいは国でそういうものを斡旋するかというと、そうではないと思うし、また、そこで商売とそれを支援するような仕組みがこれからどううまくできていくかが鍵だと思います。でも、そういう余地はだんだんできているのではないかと思います。

(阿部) 日本には本当にいろいろな豊かな森林があります。でも、意外と知られていない。それをつなぐ役割は本当に重要になってくるのだろうなという感じがしました。モデルフォレストもある意味で、そういった都会の人、企業の人を、今は限界集落という言葉になっていますが、人が少なくなっている山村と結びつけるという試みだと理解しました。

そういったモデルフォレストを実際にされている畑さんは、実際に行ってみると意識が変わったとおっしゃられたのですが、例えば社員の方が熱帯雨林にいてどのようなご感想を持たれたのかご紹介いただければと思うのですが。

(畑) 先ほど私の持ち時間の最後にちらっと申しましたけれども、たくさんいてくれる会社のメンバーの中で、やはりそれに非常にはまっていくというか熱心になる人と、そのたぐいのテーマにあまり時間を割こうとしない人の温度差が難しいといつも思いながら、でも、底上げをしながらみんなでやればいいことだと思っています。別にどこまでやるという必要はないわけですから。とにかく大事なことは、身をもって体験した人はそのことについての説得力を自分の中から見出していくわけです。失敗もあれば、「怖かった、もうあんなのはかなわん」というようなことも含めて、とにかくテレビで見ている「わあ」と思っているのとは全然違うわけです。特に熱帯雨林などは、写真で見たらものすごくきれいです。日差しがいいですから。でも、実際の生活の現場はすごいにおいの問題もあります。また、笑い話ですが、ロングハウスのホームステイの歓迎会の最初に子豚の首にモリを刺すのが訪問者のリーダーの仕事なのです。昨日まで京都でうろうろしていて、飛行機に乗って行っていきなりそれをやれと言われたら、それだけでも卒倒するような世界です。そういうショックがまず、自分自身を発見する本当の入り口だろうと私は思っています。

(阿部) ありがとうございます。

皆さんからいただいた質問票のかなりの部分はある意味で回答が出ている、お答えいただいたのかなと思いますが、その中で量として結構多かったのが、やはり木造建築のことについてなのです。果たして本当に耐震性は大丈夫なのか、あるいは火災のこともそうだし、実際にどのような効用があるのか、実際に使おうと思ったらいろいろな制約があるのではないかということなのですが、これも末松さんでしょうか。

(末松) 木造の建築については、今は大きな過渡期だと思います。特に東日本大震災の後、それをどのように総括するかについては学者の方々にもいろいろなご意見があります。しかし全体的な状況は、今回の地震に関しては、日本の木造住宅の耐震基準がしっかりしていて非常に強かったということが言えます。それから津波についても、集成材で造った工場、大きな建物、高い建物もかなり頑丈で耐えたということです。

典型的な例では、東北大学の環境学部校舎があります。大きな校舎ですが、それは完全な木造で建てたのです。大学が揺れて、ほかの建物はドアが開かなくなったりして使用禁止になる中で、木造の環境学部の校舎は無傷でそのまますぐ使えたということがあります。

私は林野庁の人間なので、いいところばかり見つけて言うのですね。典型的なのは、今度の地震で一番揺れが多かったのは栗原町というところなのですが、栗原町の庁舎は木造の建物で、3年前の宮城・岩手内陸地震でも大丈夫だったし、今回も完全に大丈夫で、避難所として使われました。けれども、そういうものをこれから冷静に分析して、どこが本当に良かったのか、まだ足りないところがあるのかということは冷静にやっていかなければいけないのです。東北の環境学部の話も、一番新しい建物なのでよかったのかもしれないのですが、多分、木造のしなやかさが本当にうまくいったのだと私たちは思っています。そういうものを一個一個分析していくことが大切だと思っています。

ただ、基本的な構造については日本はほかの国に比べて極めて厳しいことをやっているの、それについてはいいのだと思います。そうすると、今度は厳しすぎる制約をどこまで改善していけるかが課題で、これもやはり一個一個解決していくしかないのかと思っています。先ほど紹介した札幌の生協の建物は木造で造ってもらってすごくいいのですけれども、ある程度の柱は防火ボードで覆わなければいけないので、せっかくの木目をもう一度ボードで覆わなければいけないなどの制約があって、この規制は本当に要るのか要らないのかということは一一個一一個見ていかなければいけないと思っています。

日本の昔の建築の良さ、スカイツリーも法隆寺と同じ仕組みで建てているなど、今までの積み重ねを経た日本の木造建築を、この何十年かは火事に弱いのではないかということであまり使わない動きになっていましたが、それを克服したので、もう一度本来の木造をちゃんと使っていこうという流れが、これからの本流というか、しっかりした流れになるのだと思っています。建築をやっている方々、土木の学会の方々や、役所でいえば国土交通省の建築の担当者たちが言うようになってきたので、それがすごく大切なことだと思っています。

(阿部) 震災の話が出ましたが、一方では、今、仮設住宅に入られている方が2年後には新しい家を欲しいということで木材需要が増えてきます。あらためて言いますが、日本は本当に木材に関しては豊かです。にもかかわらず海外から輸入しているのが現状なのですが、今回の震災を機に日本の国産材を使うといった動きはあるのかどうか、ぜひ末松さ

んにお願いしたいのですが。

(末松) 仮設住宅の話をちょっとさせていただきます。私は3月11日には職場にいて、この後どうなるかということを経野庁長官室にすぐにみんなで集まって検討しました。先ほど言った宮城・岩手内陸地震のときに山が崩れて、旅館が流されて、すごい大被害があったので、山が崩れているのではないかと考えて次の日からヘリコプターを飛ばして山を見たところ、内陸の山は今回の地震ではあまり崩れていなかったのです。治山工事をした後も崩れていなくて大丈夫だったのですが、海岸がひどいということで、その対応を考えました。仮設住宅については、当初から3万戸要るのではないと言われていたのです。仮設住宅1戸に40本の杭が要るので、3万戸だと120万本の杭が要るのです。じゃあ杭はどのくらいあるかと思ったら、大体20万本くらいはあるだろうと言われていたので、あと100万本作らなければいけないということで、月曜日に各業界の方、森林組合の関係の方に連絡して、火曜日に集まっていただいて杭の準備をしました。それから、合板が足りなくなるのではないかとこの懸念がありました。ご案内のとおり、東北地方は合板の3割を作っていて、その工場が全部やられてしまったので、その増産体制をどうするかということです。緊急輸入をしなければいけないのではないかとマスコミの方がやいのやいの言ってきたので、緊急輸入の準備をするかと思ったのですが、結局やめたのですね。やめてそれほど問題が起らなかったのが今、私は平気でいられるのですが、なぜやめたかということ、合板は飛行機で輸入すればすぐ来るのですが、海外で作って船で日本に持ってきてということだと全然間に合わないのです。それだったら国内のほかの地域で、生産能力は高いので、原木を融通してやろうということで、そういうことで対処していました。

仮設住宅がどうにかできていくわけですが、そのときに、有名になった住田町で木造の仮設住宅を100棟造るという話になりました。われわれからすると、どうせだったら仮設住宅も木造にしようということで造ったのですが、そのときにどういうことが起こったかということ、木造住宅の段取りはあるのですが、そのの流しをどうするか、断熱材をどう入れるか、配線はどうするかということでばたばたしてものすごく手間がかかったのです。なので、やはりそのときは、基本的には「これをお願いします」と言うと1万棟建てられる状態にあった木造ではない仮設住宅の建設を優先せざるを得なかったところがありました。そこはしょうがなかったと思います。

けれどもそのとき、いろいろなことが分かりました。先ほどの話ですが、木造の100棟

やはり「安心する」と、入った方々に非常に好評だったのですね。さらに、これはなるほどと思ったのですが、木で造っていると、ぬれ縁が欲しいとか、追加的なものがあったときに、釘でとんとんと建て増ししたり、いろいろなものが付けられて、そういう意味でも非常に便利だったということがあります。今度は復興に向けて、やはりこの木の良さを使うべきだということでやっていこうと思っています。

今回は木造の仮設住宅を建てる時のタイミング、スピード感はちょっと遅かったのですが、もう準備ができてきました。これからの復興住宅は、個人の住宅もありますが、集合住宅もたくさんあると思うのですね。アパートみたいなものを造っていかなければいけません。それをできるだけ木造でやっていく。木造のプラスが生かせる木造であれば、そういうことをしていければと思います。そのためには木も出していかなければいけないので、どのようにできるかを考えていかなければいけないのです。当然、東北の木を優先的に使っていくのですが、多分それでは足りないので、日本全国で復興住宅のための木をきちんと出していくということがこれから大切になっていくと思っています。

(阿部) ありがとうございます。緊急のときはまだシステムが整っていないため木造の仮設住宅は難しかったということだそうですが、実際には木造の仮設住宅なり、あるいはこれから復興のときに建てられる建物も、特に公共の建物などは、遙さんもおっしゃられました。徐々にわれわれの意識も木造の良さを認めるように変えていかなければいけないのだなという気がします。

はっと気が付くともう残り時間が少なくなってきました。皆さんの質問に全部答えられなかったのですが、私自身はいろいろ勉強することができました。とにかくキーワードとしては「普通の適宜な森を探す」ということが大事ですし、あとは、「だまされて行く」(笑)というのも一つのキーワードだったかなと思います。

最後にもう一度、講演された方々から会場にいらっしゃる人に向けて、「私は今こういうことを考えているのだ」ということを2分ぐらいでお話しいただきます。最初に湯本さんに話をさせていただいて、次に畑さん、そして遙さん、その3人の方の意見を受け止める形で林野庁の林政部長さんに話をさせていただこうと考えます。そうしたら、湯本さん、お願いします。

(湯本) 遙さんの問題提起のおかげで、ツーリズムについては相当お話できたのですけ

れども、ほかの商品で本当に森や木そのものの良さが十分にアピールされているのかという問題については、皆さんあまり答えていないですよ。立派な木はやはり価格が高いです。また屋久杉ですみません。屋久杉は多分、世の中で一番高い材の一つで、1立米が数百万円です。高いなと思うけれども、1メートルの幅に1500年ぐらいの年輪があるのです。1500年ぐらいの年輪、つまり時間がその値段というのは、やはり仕方がないのかなと思います。いわゆるブランド物のバッグや、あるいは高級自動車に比べて、それは本当に高いものなのだろうかということは、もう一ぺん考えた方がいいと私は一つ思っています。

農作物もそうですけれども、今の林産物は、ほかのものに比べて不当に安いのではなからうかと私は常に思っているのです。そのところの適正価格は何なのか。木材の場合は、今は集成材など、いろいろ技術的にもっと安く作る方法はいっぱいあるのです。それも含めた自然素材の価格です。生態系サービス支払いという話についても、実は生態系に対する私たちの支払いは無料、あるいは安すぎるというのが、もともとの問題提起だと私は思っているのです。そういう意味で、本当の適正価格とは何かということ、やはりもう一ぺんみんなで考えてみませんかというのが最後のメッセージです。どうもありがとうございました。

(阿部) それでは、畑さん、お願いします。

(畑) 今日は鳥獣被害の問題がちらっと話題にはなっていたのですが、昨日私は北海道から帰ってきて夜ニュースを見ていたら、札幌市内でクマが非常に頻繁に出ているという現実的な話があって、「あの札幌で」という感じがあったのです。今日は隣に林野庁の末松さんがいらっしゃるのに、ある意味で挑戦的な発言を最後にするかもしれませんが、シカにしても、クマにしても、サルにしても、みんな市町村の単位や都道府県の県境など気にせずに彼らの価値観で動くわけですから、私たちの「遠い森林、近い森」という言葉のとらえ方も、従来の枠組みの中で「あかん」とか「隣はええけどな」みたいな話で考えている限りは、次の扉はなかなか開かないと思います。例えば近畿広域連合の病院のヘリコプター一つにしても、京都と兵庫で一緒に運用した方がというような考え方がこれから森を考えるには非常に大事ではないかなと実は感じていまして、私から一つ最後に皆さんに、シカの声やクマの声も聞かないと駄目だなというような呼びかけをしたいと思います。

(阿部) ありがとうございます。遙さん。

(遙) 私事ですけれども、マンションを買いました。今はやりのガラスウォールで、壁面が全部ガラスでできた、ものすごくモダンなマンションです。私の一人暮らしの後半を飾るにふさわしいと思って買いました。おしゃれな物件です。ところが、寒くて冬が越せませんでした。ガラス1枚ですから。どうしたら冬が越せるのかと相談したら、二重ガラスにしたらいいと言われました。ですから、いったんできたマンションのガラスを外して二重にさせていただいたら、今度は夏に暑くて住めないようになりました。熱気が出ていけないのです。そして3枚目のミラーガラスを張って、ようやく住めるマンションになりました。

「なぜこんな苦勞をせなあかんねん」と思ったときに、隣のおじさんのくしゃみとせきが大変響き渡りました。「はくしょん」というたびにワーンと聞こえて、なぜ結婚した覚えもない男性のくしゃみを聞きながら生きなければいけないのだろうと思いました。

そんなことを思うと、究極の森の恵みのおすそわけというのは、木でできた家なのではないのかなと思いました。モダンな家ではなく、ガラス張りの家でもなく、隣の人の声が必要以上に響き渡る家ではないとしたら、やはりそれはもう木でしかないわけですね。

ガラスウォールに住んでみて分かりましたが、窓は小さくていいです。そんなに壁一面が窓でなくていいです。その究極の森の恵みの家が私の晩年の次なる夢になりました。ありがとうございます。

(阿部) ありがとうございます。

(阿部) それでは最後に末松さん、いろいろな意見が出ました。そういったことを踏まえて、日本の林政を預かる立場としてご発言いただければと思います。

(末松) いつもは大体最後に言うことを決めるのですが、今日はいろいろな話を聞いて、何を言っているかわからない感じがあります。日本の森のこれからの可能性はすごくあると思います。森の側もこれからいろいろなことができる、使う側もこれからいろいろな可能性があるとあります。ただ、まだうまくいっていないのは間違いないのだと思います。

それはどうしてかとずっと考えて、それが解決できたとき、日本の生活が良くなるのだと思います。

日本の森のものを使えばどうなるかということです。最近、私は仕事で木質バイオマスなどエネルギーの話もやっているのですが、温室で重油を焚いて農業をしています。それは別に悪くないと思います。しかし、その重油を焚いた重油代はどこに行っているかというと、多分ドバイか何かに行って世界の経済を回して、世界経済に貢献しているのですが、もし木質ペレットなりチップを燃やすと、かかる代金は同じですが、その代金は京都の山奥や高知の山奥などに行きます。高知県では50億円の燃料代を使っているようですが、50億円が山の中に落ちれば、その50億円は山に埋めませんから、その人たちがもう一度使います。そしてぐるぐる回っていきます。そういう余地があるのに、今の私たちは、それができないのです。それにはいろいろな理由があって、行政が悪いのもあるし、それから、経済的になかなか引き合わないというようなことがあるのだと思います。でも、解決できないことではなくて、解決できることが幾つか見えてきたのではないかと思います。

行政官というのは、提案を受けても本当にできるかなと思ってしまい、大体、新しいことには拒否感を持って、「それはなかなか難しいのですが、どうぞ勝手に」とか言うことが多いのです。しかし最近思うのですが、われわれもだまされていろいろやってみるということを、これから思い切ってやってみたいと思います。でも、思い切ってやると、行政が勝手にやっていると後で怒られるのが多いのですが、いろいろなことにチャレンジすることによって価値がある時代になっているのではないかと、今日のお話を聞いて思いました。

それから、森の話はすごく多様性があって、一つのやり方では多分全然通用せず、地域ごとに違うのです。私がいろいろなところから「林野庁はどう思う」と言われて、「こう思う」と言うと、それはあるところには当てはまります。私は決してうそは言っていないし、間違ったことは言っていないのです。けれども、ほかの地域には全然当てはまらないことはたくさんあると思います。その多様性ですね。地域それぞれに国の言っていることをうまく使っていくということがこれからすごく大切なのではないかと思います。

突き詰めて究極の、というのはやはりなかなかなくて、適宜うまくやるということが非常に大切なのではないかと今日本当に思いました。「適宜」の方はわれわれ役人は得意なのですが、「だまされて」の方をこれからどうできるか、役所としてこれから林業行政をやっ

ていく上でどううまく展開できるかが鍵ではないかと私は個人的に思って、今日は非常に勉強になりました。どうもありがとうございました。

(阿部) ありがとうございました。

閉会のあいさつ

立本 成文（総合地球環境学研究所 所長）

本日は素晴らしい講演と対談、それから遙さんなどのパネルディスカッション、それに会場の皆さまのご協力を得て、非常に充実した類のないシンポジウムになったことをここに御礼申し上げます。後援していただきました文部科学省、林野庁、産経新聞社に対してもここで感謝の意を表しておきたいと思います。いつも時間がぎりぎりまで閉会あいさつには2〜3分しか残されないのです、これで今日の役目は終わりかなと思ったら、まだ少し時間がありますので、感想を申し上げたいと思います。

森林の恩恵にはさまざまな恩恵があるということです。そのさまざまな恩恵は資源だけではなくて、文化的、精神的なものもあります。一つ、湯本さんがちらっと言いましたけれども、恩恵というのは恩を返すというものがあるわけですね。恩を受けるだけでいいのか、恩を返すのはどうしたらいいのか。それに関しては、皆さんの今日のお話にはそんなになかったのではないかと思います、実はそれは関係性というところにあるわけです。これが契機になって、これがまず出発点になって関係を問い直す、つながりを問い直す。そこから恩をどのように返したらいいのか、森林との関係はどうしたらいいのかということが出てくるわけです。そういう話を行政だけには任せておけない、皆さん一人一人が考えなければいけないということです。

そのときに一番のキーワードになるのが、今日の「遠い・近い」です。阿部さんが「関係距離」という難しい言葉を使いましたけれども、関係距離というのは物理的な距離ではないということはもちろんご存じだと思います。心理的な距離、あるいは利害関係が生み出す距離、そういういろいろな距離があると思いますが、全然それには関係ないということなのです。そういうふうにしますと、つながりとは一体何なのか、関係とは一体何なのか。例えば、私はよく話に出すのですが、家族のつながりと言いますね。親子のつながりはよく分かるけれども、夫婦のつながりは一体何か、愛情がそういうつながりの根源になるのかなということです。なるかも分かりませんが。

今日は五感で感じるということがありましたが、私はこのつながりの根幹を突き詰めていけば、これは六感だと思うのです。哲学では難しく共通感覚などと言いますが、その全体で感じるものが関係、つながりということです。それが表面的には利害関係とな

ったり、あるいは安らぎとなったり、そういうものになるのですけれども、その根源的なつながりを皆さんが体験しなければ、その関係は分からないのです。今日のキーワードの一つになっているように、「適当な」森に行って、それを体験する、体感する。考えただけでは駄目で、体感するということが、皆さんもぜひ体感していただきたいと思います。

残るのは、体感して、それからどうなのかということですが、これも今すぐ答えが出るわけではなくて、体感した後、一人一人が考えていかなければいけないと思います。

今日はたくさんの宿題を残していただいたということで、非常に知的な刺激のある会合になったかと喜んでおります。担当機関としまして一言ごあいさつ申し上げます。どうもありがとうございました。